

黒菱山荘 50周年 特集

幾多の風雪に耐え、黒菱山荘は今年50周年を迎えます。春、夏、秋、冬季節ごとの楽しみ方があります。50周年を迎える今年、是非仲間を募って、黒菱山荘で楽しいひと時を過ごしましょう！50周年記念特集記事は、2ページ、27～31ページをご覧ください。

2011年度 定時総会、懇親会 開催のお知らせ

本年度定時総会を、下記の通り開催いたします。総会終了後同じ場所にて懇親会(午後4時より)を開催致します。ビュッフェスタイルの食事とお酒の用意もあります、是非誘いあわせの上お出かけください。

日時

2011年8月27日 土曜日 午後3時より
(懇親会は午後4時より開催します)

場所

石神井倶楽部(レストラン あおしま内)
港区北青山1-2-3 青山ビルB1/地下鉄 青山一丁目駅
下車0番出口から青山ビルB1に入ります。B1入口を入りすぐ右側のお店
です。(当日は看板を設置します) / TEL: 03-3403-3461

懇親会会費 3,000円

会場が母校から青山の『石神井倶楽部』に変更になっています。ご注意ください。

会場を変更した 経緯について

学校行事のスケジュールとの調整が難しく、日程を決定するのが遅くなり、広報誌作成のスケジュールにも影響があること、会場設営の人手確保が難しい、アルコールが禁止されて、懇親会への参加者が減少傾向にあること等があり、今年度は会場変更を決定いたしました。石神井倶楽部とは、現会長 城和裕氏(高12回)の経営するレストランあおしま内に同氏のご好意により、石神井同窓生が気軽にクラス会、同期会などに使えるようにと、設置されています。同窓会の役員会、打ち合わせにも利用しています。また、同氏の中野の事務所に『同窓会事務局』も設置させていただいております。

もくじ

定時総会、懇親会開催のお知らせ…(表紙)p1	総会議案資料…p6	黒菱山荘50周年記念特集記事…p27
写真でみる黒菱山荘50周年特集…p2	同窓生を訪ねて…p10	母校創立70周年記念式典報告…(裏表紙)p32
生徒の活動状況…p3	投稿記事…p17	編集後記…(裏表紙)p32
ご挨拶…p4		

東日本大震災において、お亡くなりになられた方々のご冥福をお祈りし、ご遺族の皆様へお悔やみを申し上げます。また被害にあわれた皆さまに心よりお見舞いを申し上げるとともに、一日も早い復興を心より祈念いたします。

祝 50 周年 黒菱山荘



石神井高校同窓会で管理している黒菱山荘が今年 50 周年を迎えました。



黒菱山荘 50 周年記念行事 黒菱山荘 50 周年の集い

黒菱山荘 50 周年を記念して、『50 周年の集い』を下記の日程で行います。当日は、お世話になっている『対岳館』の丸山庄司様・徹也様をはじめとする白馬村の方々に謝意を示し、山寮協議会の各校の皆様、建設から現在まで山荘に携わられました多くの関係者の皆様と共に山荘 50 周年を振り返りたいと思います。参加希望される方は、32 回浦川まで電話かメールでお願いします。

日時 2011 年 7 月 23 日 (土) 18:00~20:00

場所 ホテル『対岳館』(長野県白馬村)

会費 ¥5,000

連絡先 浦川伸一(32 回) TEL 048-477-5040

メール urakawas@mopera.net

唐松岳登山のお誘い

山荘委員会では、山荘 50 周年を記念して唐松岳登山を計画しています。山荘に集合して高山植物の咲く八方尾根をゆっくり唐松岳まで約 5 時間かけて登り、唐松岳山頂山荘に 1 泊して次の日に下山します。体力面では、普段軽い運動をされている方であれば大丈夫だと思います。ただ、2500m 以上の後立山連峰の稜線まで行きますので、防寒具・雨具・靴などの装備が必要です。

日程 2011 年 7 月 22 日 (金) 10:00

長野県白馬村石神井高校黒菱山荘出発
(早朝の東京発長野新幹線を利用すれば間に合います)

7 月 23 日 (土) 14:00 頃

石神井高校黒菱山荘解散

宿泊 唐松岳山頂山荘

ガイド 登山案内人 石田弘行(16 回生) 現地在住

希望される方は、前日の宿泊(山荘またはふもとの宿)および解散後の宿泊(ふもとの宿)の紹介も可能です。

詳細・申し込みは、山荘委員会泉水(33 回) 090-3512-8423 までお願いします。

石神井なう!

生徒の活動状況



現役生はパワフルに高校生活を送っています。生徒会役員の皆さんや体育祭の写真を紹介しましょう。



生徒会活動



体育祭 2011.6.4

今年は、同窓会総会の開催が遅くなったので、体育祭の取材に向かうことができました。熱気あふれる体育祭は、昔も今も変わらぬ石神井の華のひとつです。



体育祭での一こま



自由と自律を重んじた教育を目指します 校長 竹内 秀一



本年4月に本校に着任しました。前任校は、同じ練馬区にあるエンカレッジスクールの練馬工業高校で、「ものづくり」を柱とした教育活動を通して生徒たちの「学び直し」と「自分発見」を全力で支援してきました。

私の専門は日本史ですので、今年度、武蔵国の一大勢力であった豊島氏の拠点石神井城址近くの本校に赴任できたことを嬉しく思っております。

石神井高校は、旧制中学ナンバースクールの伝統を受け継ぐ歴史ある学校で、社会に貢献する先輩諸氏を数多く輩出してきた誇りある高校であると思います。

昨年の70周年記念式典では文化功労者を受賞された、天体力学の古在由秀東大名誉教授とモーツァルトの世界的権威、海老沢敏先生のお二人に記念講演をしていただき、先輩諸氏と一緒に在校生も聴講し、その栄誉を共有いたしました。

旧制中学時代の学風を受け継いだ自由な校風は今も変わらないようです。自分で考えて自分で行動し、責任をとるといふ自律の精神は本校の大切な資産です。間違っても「勝手気まま」という意味の「自由」とは混同しないよう伝統の校風を校長として維持していく方針です。

幸い、70年の歴史の上に、新しい校舎、施設設備も整い、昔と変わらぬ広い校庭に恵まれ、落ち着いた学習環境で在校生は毎日、勉学や学校行事、部活動に励み活気ある学園生活を送っています。

平成22年度からは、本校の進学率向上の取り組みが東京都教育委員会から評価され、東京都の重点支援校に指定されました。「進化する伝統校～充実した学校生活と確かな進路選択を全力で支援～」というスローガンのもと、教育委員会からの様々な支援と優秀な教員による指導を通して生徒の取り組みに弾みがつき、進学率がさらに向上することが期待されます。

本校の教育活動は、学力向上と部活動の活性化を2本の柱に、生得の才能を伸ばし、人間としての矜持をもつ生徒を育成することを目標といたしております。

部活動で疲労困憊して自宅学習が疎かになるような甘えを許さない厳しさも併せ持ち、文武両道に通じるエネルギーあふれる生徒に育てることが我々教員の重要な役割と考えています。

本校を卒業された先輩諸氏の多くから、「石神井を卒業して本当に良かった」とよく伺います。我々、石神井高校の教職員一同は、今いる在校生からそのような賛辞の言葉をもらえるよう一丸となって教育活動に取り組んで参ります。是非ご期待ください。

大いに部活に励み、勉強もしっかりとやろう 副校長 西塚 春義



本年4月に本校に赴任しましたが、私は学校群制度の時代に大泉高校に入学しましたので、もしかすると石神井高校の卒業生になっていたかもしれません。その石神井高校に勤務することに大なる親しみを感じています。

例えば当時、スポーツの石神井、勉強の大泉、恋愛の井草などと言われ、当時から石神井のスポーツ部活には瞠目していたものです。そして、ちよっぴり井草にも憧れていたものでした。半分、冗談ですが。

また、当時の思い出として、プールの無かった大泉では石神井のプールを借りて臨海学校の準備のため水泳の授業を受けたことがありました。色々石神井とは縁があったわけですね。

大泉では剣道部に所属し、剣道を続けるために筑波大に進学して剣道の専門家をめざし、現在剣道七段です。管理職になる前は体育の教員として特に剣道部の指導には熱をいれてきました。

石神井高校でも時間を作って剣道部の指導も行っていきたいと思っております。剣道は自分に勝つ「克己心」を養う武道です。戦う相手はいますが、つきつめると自分との戦いが剣道だと考えています。勉学も剣道精神に通じます。

長年の教師としての経験から、大会などで高い成果をあげた生徒の方が進学でもいい結果を出しています。この経験をバックボーンにして生徒の部活のさらなる活性化、学力向上の実現に努めるつもりです。

授業中は授業に集中し、放課後は部活に情熱を傾け、夕刻6時に部活を切り上げたら、その後は自宅学習を必ず行い、自分に負けない生活習慣をつけ、充実した高校生活を生徒全員に体験してもらいたい。これが私の石神井生に期待することです。

ご挨拶

同窓会会長 城 和裕 (高12回)

東日本大震災で亡くなられた方々に心からの哀悼の意を表し、被災された皆さんへのお見舞いと少しでも早い復興をお祈り致します。我々でも何か出来る事を実行しましょう。

母校での卒業式も1日だけ、順延して厳粛な雰囲気の中、無事済ませる事も出来、入学式も余震の中で新入生達284名を迎える事が出来ました。今年の卒業生は100%同窓会に入会されて3年生の担任のご協力に感謝申し上げます。ただ驚いた事に小池校長が在籍2年間で異動となり副校長の宮地先生も定年で去られ、新しく、竹内秀一校長と西塚春義副校長をお迎えする事になった訳ですが、余りにも目まぐるしく人事を変える、都庁の方針に疑問を持つ次第です。

母校は今回の一連の地震にもひび割れ一つ無く、節電の為少々暗いのと、エレベーターを止めている位で授業には影響は無いようです。

但し、将来、東京が大型地震に遭遇すると、都立高校は、被災者保護の為に講堂や施設を開放する事になるそうで、今からその心掛けや訓練、ボランティア活動のノウハウも必要になると思われます。教育支援基金も春の語学研修に福島県に送る予定は今回の地震で受け入れ側も被災しており、現在順延されて居りますが、校内で出来る事は引き続き行って居り有効に使われております事をご報告致します。

我が同窓会が立ちあげた、『都立高校同窓会の輪』も5回目を開き、現役の都議会議員の中谷祐二氏(34回生)にも参加して貰い、各校の意見を聞きながら、行政に対しても必要な意見を述べて行く所存で他の都立高校同窓会にも声を掛けながら活性化してまいりたい所存でございます。

《ご本人のプロフィール》

1941年8月11日生・巳年・獅子座・O型



職歴

外食産業の経営一筋

趣味

旨いもの探し、特にシシリーワインを好み、毎年現地で試飲痛飲している。

ゴルフ、旅行

《好きなタレント》

宝塚元女優の玉城あけみさん

卒業生の家族を狙う

「振込め詐欺」が続発!被害総額1200万!

石神井警察署



「石神井高校同窓会名簿などを悪用し卒業後7～10年の家庭を中心に昨年7月から9月だけで4件、被害総額1200万円万円という巨額の振込め詐欺が発生しています」と石神井警察署から連絡をいただいた同窓会では、詐欺の詳細を知るために石神井警察の太田徳彦署長から振り込め詐欺の特徴や警戒する点についてお話をお伺いしました。

太田署長は、「手口は巧妙かつ複雑です。卒業生の実名で『携帯番号を変えた』といった電話の後『借金返済のため現金を振込んで』と連絡が来る手口や、警察や弁護士を名乗り『息子さんが株で会社に迷惑を掛けた』『交通事故を起こした』などと偽り現金、通帳、カードを詐取する手口など様々な方法で電話してきます。

こうした電話があった場合、必ず本人(元の電話)に確認する共に110番通報するなど、被害にあわぬよう冷静な行動をしてください」と冷静という言葉が強調していました。突然の電話で頭が真っ白になり、思考能力を失い冷静さを欠いて詐欺師の手口に嵌まるのだそうです。

「声を騙すために、最初は風邪を引いたなどというのが常套手段です」とも言われました。皆さん、日頃から家族との会話に務め、詐欺師の巧妙な手口に嵌まらぬよう気をつけましょう。なお蛇足ですが、同窓会役員としては詐欺師に振り込むお金があるなら、財政難の同窓会に振り込んでほしいという切なる願いもありますことを付け加えておきます。

(記/13回生Y.N生)

2011年度定期総会 議案資料

1. 開催日時：2011年8月27日土曜日 午後3時
2. 開催場所：石神井倶楽部（レストラン あおしま内）

議 題

- 第1号議案 2010年度事業報告
- 第2号議案 2010年度収支決算及び会計監査報告
- 第3号議案 2011年度事業計画
- 第4号議案 2011年度収支予算
- 第5号議案 役員改選
- 第6号議案 寄付金について

報 告 事 項

- 1 教育支援基金の運営状況及び基金特別会計の収支について
- 2 黒菱山荘50周年記念式典について
- 3 その他



第1号議案 2010年度事業報告

- 4月7日 母校入学式に前会長、会長、副会長列席
- 18日 役員会開催（きずな発行、総会、懇親会関係）
- 5月11日 役員会開催（きずな発行、総会、懇親会関係）
- 16日 新ホームページ作成打ち合せ会議開催
- 20日 21日白馬村黒菱山荘取材（新ホームページ作成のため）
- 28日 役員会開催（総会、懇親会、70周年記念式典関係）
- 29日 母校体育祭視察、新ホームページ作成のため、武蔵関周辺を取材
- 6月10日 三者（学校、PTA、同窓会）協議会開催（70周年記念式典関係）
- 7月3日 新ホームページ作成打ち合せ会議開催
先生方との懇親会開催（先生11名が出席、更なる協力体制を確認）
- 21日 役員会開催（総会、懇親会、70周年記念式典関係）
- 25日 新ホームページ作成打ち合せ会議開催
- 30日 2010年度総会、懇親会開催
議案はすべて満場一致で承認された
懇親会は約50名の同窓生が参加し、和やかに開催された
- 8月17日 新ホームページ作成打ち合せ会議開催
- 24日 役員会開催（70周年記念式典、文化祭参加関係）
- 9月18日 母校文化祭にフリーマーケットで参加（収益金は全て教育支援基金へ）
- 10月2日 日比谷公会堂で開催された校歌祭に参加
同窓生約30名吹奏学部OB20名が参加、終了後懇親会開催
- 25日 三者協議会開催（70周年記念式典最終打ち合わせ）
- 30日 70周年記念式典、祝賀会開催
古在由秀氏（中1回）元国立天文台長、海老沢敏氏（高3回）元国立音学大学長、両氏による記念講演会には、在校生全員も出席し熱心に聞き入った。生徒有志によるダンスや、吹奏楽部による演奏が披露された祝賀会は、約200名の同窓生、長野県白馬村より黒菱山荘でお世話になっている対岳館当主丸山徹也氏を初め多くの来賓の皆様で盛大に開催された
- 11月29日 役員会開催（70周年記念式典反省、山荘50周年記念式典関係）
- 2011年1月28日 役員会開催（山荘50周年記念式典、振込め詐欺発生の件関係）
- 2月10日 石神井警察取材（振込め詐欺事件に関する取材）
取材後、関連記事と防止策について、ホームページに掲載

- 2月28日 広報誌『きずな』打ち合わせ会議開催
 3月13日 母校卒業式に、前会長、会長、副会長列席
 会長が挨拶、紅白饅頭を卒業生に贈呈

第2号議案 2010年度収支決算および会計監査報告

2010年度(平成22年度) 決算報告書

(2010年4月1日～2011年3月31日)

収入の部			
	2010年度予算	2010年度実績	備考
前期繰越金	14,323,979	14,323,979	
(内運営基金)	(13,745,841)	(13,745,841)	
入会金	1,085,000	1,089,556	
年会費	3,500,000	2,381,100	
雑収入	35,000	509,500	70周年記念行事会費
合計	18,943,979	18,304,135	
支出の部			
	2010年度予算	2010年度実績	備考
総会費	150,000	82,765	
本部費	700,000	558,946	
広報費	2,000,000	2,069,951	きずな作成費
発送費	1,800,000	1,732,716	きずな発送費
行事費	300,000	1,145,595	70周年行事費等
山荘費		542,950	
新会員費	140,000	112,455	榮太楼饅頭
予備費			
小計	5,090,000	6,245,378	
次期繰越金	13,853,979	12,058,757	
合計	18,943,979	18,304,135	

上記の通り、2010年度会計収支を決算して報告いたします。
 会計 上野 俊彦

上記会計収支決算を監査した結果、適正であることを認めます。
 2011年5月30日 会計監査 栗山 隆
 会計監査 広瀬 由貴

平成22年度 黒菱山荘会計報告

(平成22年4月1日～平成23年3月31日)

【収入の部】	金額	備考
助成金	500,000	同窓会より助成金
宿泊費	343,000	宿泊費
受取利息	124	預金利息
計	843,124	
【支出の部】	金額	備考
交通費	155,784	乗車券、特急券、高速道路料、リフト代他
通信費	32,096	電話代、切手、はがき、郵送料
水道光熱費	139,855	水道代、プロパン代他
会議費	91,597	月例会議、総会懇親会、山寮協議会懇親会費
会費	5,000	山寮協議会年会費
修繕費	8,126	設備関係補修費等
備品費	2,424	什器備品費、鍋釜等
雑費	145,499	ゴミ処理費、お土産、お見舞い、消耗品
借地料	150,000	借地料
山荘管理費	50,000	山荘管理費(対岳館)
修繕準備金	62,743	黒菱山荘修繕準備金へ(平成22年度一般会計残金)
計	843,124	

第3号議案 2011年度事業計画

今年度は、広報誌『きずな』、ホームページを、さらに見直し、楽しく読みやすくするとともに、同窓生の皆さんに有意義な情報交換の場所になるよう改善していきます。

また、各期の幹事を再度確認し、会費の徴収や活動を幅広いものにしていきます。

同窓会の輪の活動は、参加高校を増やすとともに、活動の本質を決めて、方向性を確立します。

2011年4月7日 入学式に、前会長、会長、副会長列席

6月4日 体育祭視察、取材
先生、PTAとの懇親会

7月1日 きずな発行
22日23日黒菱山荘50周年記念登山開催
23日黒菱山荘50周年の集い開催

8月27日 2011年度定時総会、懇親会開催
(本年は、開催会場を母校から石神井倶楽部に変更して開催します)

9月17日 母校文化祭に参加

10月1日 校歌祭参加(日比谷公会堂にて) 終了後懇親会開催

2012年3月 卒業式に会長、副会長、役員出席
卒業生全員に記念の紅白饅頭を贈呈

日程は予定ですので、変更することがあります。

その他、役員会、ホームページ、きずな発行関係の会議は随時開催いたします。

第4号議案 2010年度収支予算

2011年度(平成23年度) 予算案

収入の部

	2011年度予算	備 考
前期繰越金	12,058,757	
入 会 金	1,174,675	3/24入金済み
年 会 費	3,000,000	
雑 収 入	100,000	
合 計	16,333,432	

支出の部

	2011年度予算	備 考
総 会 費	150,000	
本 部 費	550,000	
広 報 費	2,050,000	
発 送 費	1,800,000	
行 事 費	200,000	
山 荘 費	500,000	
新会員費	110,000	
予 備 費	50,000	
小 計	5,410,000	
次期繰越金	10,923,432	
合 計	16,333,432	



第5号議案 役員改選

会 長	大久保利一 (高17回) 新任	会 計	上野 俊彦 (高17回) 留任
副会長	板谷 方彦 (高27回) 留任 広報担当	書 記	山下 章 (高19回) 留任
副会長	浦川 伸一 (高32回) 留任 山荘担当	書 記	黒川 寛恵 (高17回) 留任
副会長	久保内祥郎 (高21回) 新任 総務担当	会計監査	栗山 隆 (高12回) 留任
副会長	勝見 鈴代 (高20回) 留任 企画担当	会計監査	広瀬 由貴 (高39回) 留任

第6号議案 寄付金について

報告事項

教育支援基金の運営状況および基金特別会計の収支について
2010年度教育支援基金事業報告

収入の部

本年度受入拠出金は130件、	839,985円
前年度からの繰越金	2,911,245円
収入金合計	3,751,230円

支出の部

イギリス留学支援(9名)	180,000円
支払手数料	14,390円
支出金合計	194,390円
収支残高	3,556,840円

教育支援基金事業の基金募集は、2011年3月31日をもって終了いたしました。

2008年4月1日より3年間にわたり、延べ595件の支援をいただきました。

総額5,345,850円の拠出金を受入ました。

その内支援金として1,713,300円、支払い手数料75,710円を支出いたしました。

支援金明細

修学旅行現地の講師お礼	50,000円
校庭の防御ネット	420,000円
水泳部関東大会出場応援補助	50,000円
ブリチッシュヒルズ講習料補助	230,000円 (2008年度、2009年度)
地球のステージ公演費補助	33,300円
サテライト講座講習料	750,000円
イギリス留学支援	180,000円

サテライト講座（センター英語）へのご支援、本当にありがとうございました。受講者は全員、覚えるべきポイントがよく分かり、大変、ためになったと言っておりました。特に、3年生は、夏休み中に何回も復習をしたいと積極的に希望したので、情報科の教員の協力を得て、かなりの時間英語の学習を行うことができました。その結果、全出席で通った3年生が、学習院、國學院、法政各大学に合格することができました。

今年度の3年、63期生の大学受験結果は、ここ数年で一番すばらしく、延べ人数で、早慶上智に5名、GMARCHに11名合格しています。その要因として、①授業を大切にしている、②集団で話を聞くことができる、③途中で諦めず最後まで頑張る、④自信の弱点と冷静に向き合うことができる、という生徒が多数いたことが挙げられます。これも、63期担任団が1年次より「センター・一般入試で多数の生徒を合格させる」「勉強も部活も行事も進路も頑張る」指導を積み重ね、各教科の教員も分かる授業作りや個に応じた丁寧な補習を継続してきた結果であると自負しております。

石神井高校の学力向上指導は、ようやくスタートラインについた所です。今後ともよろしくご理解・ご協力のほど、お願い申し上げます。
進路部 古屋先生より

2011年3月31日現在の残高3,556,840円に関しましては、学校側と協議の上母校発展のため、大切に用途を決めて参りますとともに、2012年度の広報誌『きずな』にてご報告申し上げます。ご支援を頂きました皆様に心よりお礼申し上げます。



高校の思い出

地球最北の村シオラパークを舞台にイヌイットの生活を

大島 育雄
(18回生)

私が石神井高校に入学したのは、すでに今から46、7年前のことになってしまいました。記憶を掘り起こすこともされずに40年以上も埋もれていたもので、思い出といってもいささか心もとない気がします。

私は越境入学で北多摩の久留米中学から橋本京子さんと二人で入学しましたが、石神井の歴史や校風など一切知らないままに入学してしまいました。

実家は農業で野良仕事の手伝いとか、家畜の世話などいつもやらされておりました。当時は青白い顔の病気がちの少年で、とくに胃腸が弱く何とか強い身体になりたいと思って柔道部に入部したことが唯一自分で決めたことでした。

柔道部は3年間続けることができ、以後随分と自信というか、心のよりどころができたように思います。

1年のルームは兵舎跡の木造二階建て、冬は石炭ストーブのと燃える牧野先生生のクラスでした。外はまさに広々と広がるガンちゃんの練兵場で幸か不幸か3年間みっちり鍛えていただきました。

うさぎ跳び、手押車、両足跳び、腕立て伏せなどなど延々と繰り返される第一回目の90分後は、疲労困憊して二階へやっと這い登ったような思い出とか、ぐったり疲れて、居眠りする者ばかりの教室が思い出されます。

牧野先生はまったく物知らずの我々に実にこまめに思いやり深く指導してくださいました。以後、「この頃の若い者は」などなどと言えるようになったのもこのあたりから来るものと思います。我々は要領を覚えただけではなく、実に力強くなりました。

ぶん殴られても蹴飛ばされても、何ともないほどの自信もようなものさえ芽生え、辛さを乗り越えた仲間意識も共有していたように思います。

英語の小林先生には非常に申し訳ないことをしたと今でも時々思い出します。どういうわけか教科書が売り切れで、なかなか入手できず、教科書なしで出席するような日々が続いていました。当然、リーディングの指名があっても読めるわけもなく毎回、立たされて皆の笑い物になっていました。

ある時、テストの答案を白紙で出し、兵舎の教員室でストーブの脇に立たされました。この時、小林先生は実に静かにこう言われました。

「私は少なくとも私の門の範囲ではあるが、君たちに少しでも英語を覚えてもらおうと努力している。なのに君は非常識である。ただの一言すら、反応すら見せくれなかった」

私はその時、初めて自分以外のことを考えるべきことを学んだように記憶しています。

数学の繁田先生の「どうだ、分かったか?」「分かりません」「ええい、分かれい」という口癖なども思い出します。よく数学のことそっちのけで、昔の色々な話を延々と楽しく聞かせていただいたものです。

ガンちゃんの雨の日の体育の時間の言葉。「おめえら、帰ったらおふくろに良く言っとけよ。俺のことを校長のところなんか文句言いにいっても無駄だからな。校長なんか怖くねえや。ついこないだ来たくせに。俺なんかずっとここにいるからよ。やりてえようにやるからよ。おめえ等、使い物になんねえじゃねいか」

ちなみに1年の体育の成績はほとんど全員1。中に数人2があったとか。そして、3年の内申書では全員5だったそうです。まったく涙すら出るくらいのものでした。

社会の石木さんとか、3年の時の男所帯の担任であった化学のハゲ松先生とか体育の青木さん、最初のうちは張り切りすぎて、生意気な奴と思われていた若かった保母さんとか随分と色々な先生にお世話になったものです。

3年の時は理科系に進むつもりで、男ばかりのクラスで、窓の外は体育館、その後ろ側はスポーツ部の部室が並ぶ男生徒ばかりがたむろする場所でした。

仲間もまじめなのはサッカー部の高田君ぐらいで、エロ漫画の中島君とか、サカキやチャーリーなどがいつも近くにいて勉強どころではありませんでした。

物理の黒崎先生(黒菱山荘の黒さんはなんと自宅の直ぐ近くで、後々山仲間の集まりなどにも参加させていただいています)には、時々居眠りをしていて、ゲンコツでこずかれています。

当時、よく試験の成績のよい答案が廊下に張り出されるのが不公平であると、盗み出した社会科の答案を屋上かちばらまいて石木先生から注意されたなどもありました。

柔道部のことでは色々辛いことも思い出されます。とくに宮川さんのうき腰は高々と投げあげられる分、受身が痛く、また立つと直ぐ投げ飛ばされ3分間の乱取りの内、空中にいる方が長く感じられたものです。高橋さんの外刈りには呼吸が止まる思いでした。

私の同期は押尾くんはじめ、一見ひょろりとした松崎君とか大勢おりました。顔は思い出せるのに、名前が思い出せないもどかしさ。ごめんなさい。

ガンさんの氷川高校での夏合宿や関町のお花の稽古場を借りての合宿。関公園の淵にある「池のハヤさん」の家で賄をやってもらい、鉄火井などをたらふく食った合宿でした。

この仲間で私を尾瀬に連れていってくれた、どうしても名前を思い出せない君。あの時の山と自然の美しさは今でも忘れません。ありがとう。

その後、非常に山に興味をもち、日大では山岳部に、そして、グリーンランドへと続くその出発点がここにあったようです。

今、私は極北の大自然の中にどっぷり浸かって生活しています。身体を動かして猟師をしていることが生きている証のような気がします。

いつまでも20歳代のような気持ちで死ぬまで大人の遊びを、遊び切ろうとしている63歳です。屋根とエサは無料です。一緒に遊びましょう。人生につまずいた時でも、この大自然は必ず癒してくれるはずです。

北極熊のこと

最近、地球の温暖化がしきりに喧伝され、北極クマが絶滅の危機にあるような報道が目につきます。しかし、実際は全くの嘘の報道なので、注意が必要です。

最近、意図的であるなしに関わらず、事実と異なる報道により、世界が操られているような気がして、私もその当事者であることに気づいたりして実に嫌な気分になることがあります。

北極クマは小型航空などを使った、いわゆるスポーツハントなどによって激減し、保護政策によってその頭数が増加し始めたのが、おそらく70年代に入ることです。

私どもの地域、北西グリーンランドでも、70年代のはじめには、北部のカナダホエルズメア島との間のスミス海峡あたりに北極クマ狩りに出かけても足跡すら発見できないようなこともありました。まして村の近くでは尚更のことでした。

しかしその後、90年代頃から村の近くでもクマの足跡が見られるのはごく普通となり、昨年など私でさえ夏場に5頭も見えています。

あらゆる動物に理不尽なくらいに狩猟が制限されておりますので、グリーンランドの中でも増えこそすれ、減るようなことはありません。アラスカあたりで、海に溺れた北極熊が見つかったからと温暖化で氷がなくなると北極クマが絶滅するなどという単なる憶測でものを言う生物学者も馬鹿なら、すぐそれに乗って報道する方もまた馬鹿なことです。

早速、これに乗って北極クマも絶滅種にしてしまったアメリカにはだれか必ずこれを利用して得をするという奴がいるはずです。

北極クマは草も食うし、海に潜って海草も食ったり、陸にはエサになる動物がいます。別に氷がなくても陸上で生活できる生物です。そして、もし私が



北極クマであれば、海に面した崖の上にじっと待って下を通るアザラシやセイウチ、鯨を狙うに違いありません。それほどこちらでは動物の沢山いる場所があちこちにあるわけです。

最近、北極海に近い北西グリーンランドのピーターマン氷河の末端が離れ、巨大な氷山を送り出しました。この後、ラジオのニュースで一角クジラが危ないというアメリカの生物学者の意見が報道されました。私たちは大笑いしましたが、何故だと思えますか。

一角クジラが氷山の下に潜って反対側に出る前に窒息するというわけです。

そんなことをする動物がいると思いますか。思い上がった人間ほどバカなことを言うとい好例であると思います。

私がこの40年近く、この地での生活で得た感覚では、地元のそれも生物資源を頼って今までも、そしてこれからも生きていかざるをえない者にとって、これら生物を絶滅に追い込むほどに捕獲するという事は「死活問題である」ためにほとんどあり得ないことです。

一部の例外を除き、ほとんど全てが外部の商業活動によって行われた事実は17世紀から19世紀にわたる近代史がはっきりと証明していることです。

クジラ、アザラシ類のそれも毛皮と脂だけを利用しようと世界中を荒らし回ったのは欧米の先代であったことをもう一度確認しておく必要があると思います。後は野となれ山となれのできるのは地元の者ではありません。

先日、私の出ているNHKのハイビジョン放送のビデオを見ました。一つ、非常に気になる部分があり、ついでに記しておきます。

アザラシの乱獲が世界の問題になっているというナレーションがありました。これは嘘です。しかも、この部分はフィルムの流れの中でなくてはならない必然が全くなく、NHKもまるでグリーンピースと同じようなことを行っていることを知りました。

いかにも我々が乱獲をやっているように受け取れるものです。アザラシの乱獲が行われたのは前の世紀のことで、これも欧米人達によって行われたものです。

グリーンピースによれば、カナダとグリーンランド付近でハープシールが絶滅に瀕しているなどのニュースが流されているようです。しかしこれも嘘です。

事実は一時世界中を騒がせた氷上の可愛いハープシールの子を殴り殺してその毛皮を集めるシーンを覚えておられるでしょう。その後、あの猟がやりにくくなったため、恐ろしい勢いでハープシールが増加しました。ついにはカナダやグリーンランドの漁業が脅かされるほどになり、その数も500万頭以上と生物学者に推定されています。どうして絶滅など考えられましょう。

そして今、ヨーロッパユニオンはアザラシ皮のヨーロッパへの持ち込みを禁止しようとしています。さて、誰が得をするのでしょうか。

今、グリーンランドは、海底油田とか、種々の鉱物資源の大規模な開発が行われようとしています。アルゴアなどのアルミニウムの巨大な精錬工場を誘致しようとしてもいます。漁業と狩猟の国から大きく変身しようとしています。

巨大な資本投下によって行われるこれらのいわゆる開発はこれまでの例でも見られるように、地元



はほとんど役に立たないもので、結果、環境の大破壊、汚染、そして人体への後遺症とマイナスの面ばかり残るもののようです。

何よりもこれらの鉱物資源は取り出せば減る一方で、生物資源のように決して再生することはありません。いわば、鉱物資源は一時的な夢のようなものかもしれません。

温暖化のことで、さかんに二酸化炭素による温室効果説が叫ばれていますが、先日、読ませてもらった「正しく知る地球温暖化」（赤祖父俊一著 誠文堂新光社刊）では、それより大きな自然の動きに原因を求めるべく丁寧に解説されており、なるほど納得しました。

著者の赤祖父俊一氏は、永年アラスカの極北の地で色々な調査研究の指導をしておられた方で、すでに1800年代から始まった地球の温暖化について多方面から解説されています。氏の主張はまだ少数意見ではありますが、世界中が氏の主張と逆の情報操作を受けているような感を禁じ得ません。

そして、まさにこの地でも大きな変化が起こっています。2000年の半ばより、突然、海氷の張るのが2カ月以上遅れるようになり、今に至っています。

それまでは10月半ばくらいからフィヨルドの氷は安定して犬ぞりが使えるようになり、翌年の7月に氷が去るのが普通でした。

ところが、今では5月に海氷が割れて流れだすような状態です。無論、氷の厚さも1メートル半以上から1メートル以下へと半分くらいに減ってしまいました。

そして、この数カ月間に使える氷はほぼフィヨルドの中に限られており、以前30キロも40キロも沖へと犬ぞりを駆って行われたセイウチ猟など思いもよらぬ昔話になってしまいました。

気候的に農業生産の望めないこの極北の地で生活するためには必然的に他の野生の生物に頼る必要があります。

そしてこの広大な極北の地にはごく少数の人々しかおらぬこともありますが、いたるところに豊かな

生物たちがおります。

それを利用させてもらう私達猟師の心構えとして、自然への感謝と必要な分の獲物のみ狩ることと、捕ったものは全て利用することをいつも心に止めていこうと思う次第です。

ラジオのニュースによると現在、グリーンランドの氷床は予想を遥かに超えた勢いで溶けているようです。（無論夏場の話ですが）

そして、氷による巨大な圧力が減少することにより場所によっては日本の6倍以上もあるこの島は毎年3cmから4cmも浮き上がっているそうです。

また温暖化の影響でシシャモの北限などもどんどん北上しているようで、もしかすると何年かたてば私達の村でも初夏に産卵に押し寄せるシシャモが浜で嫌になるほど捕れるようになるかもしれません。

動物たちも（クジラ類など）北上しつつあります。私たちのところでも動物たちの季節移動（冬に夏下して夏に北上するという大きな動き）の時期のズレや移動ルートの変化などなど変化に順応しようとする動物たちの変化を見逃せません。

気温ばかりではなく、水温も上昇していますので、同じ気温下でも氷の成長は悪く、逆に溶け易くなっています。

アザラシなどの換毛の時期もかなりズレがあります。一般に初夏から夏にかけて換毛が抜け代わり、9月に入る前にほとんど全て終わっているものですが、この数年、冬場になっても換毛のお終わっていないアザラシを多く見受けるようになってきました。

この冬場は私達のフィヨルドはセイウチがやたらと多く、大昔の話のようにアザラシがまったく見受けられません。

セイウチは貝ばかりでなく、アザラシの脂身を皮ごと吸い取って食べるのでアザラシに取っては猟師以上の天敵です。

先にも述べたとおり、理不尽な狩猟規制のためにセイウチの数が増えすぎていることも考えられます。

生物資源がいくらでも捕ってはいけないというのは、非常に困ることです。気候変化に加えて異常なくらいの狩猟規制のため（グリーンピースなどの外からの圧力もあり）ライフ・オブ・ヘルス・アンド・サステナビリティ（LOHAS）は変化に追いついていけないようです。



（記／13回生 Y.N生）

8回生 中嶋 保さんの木工房訪問記



自力で山中にレトロ郵便局移設し木工所に

8回生の中嶋 保さんが檜原村の山中に古い木造の郵便局を移設しているのので、「きずな」に紹介しては、という13回生同期の秋山奉由君からの情報を得て、記者は一路檜原村に向かった。中嶋さんと秋山君は山岳部の先輩後輩の間柄だ。

東京の奥座敷、武蔵五日市駅からバスで数十分、弘沢の滝バス停から数分の遊歩道脇にお目当てのレトロな郵便局舎があり、中嶋先輩が出迎えてくれる。

昭和4年築のレトロな郵便局は現在は木工品の製作販売店「木工房 森のささやき」として営業を営んでいる。徒歩、数分で日本の滝百選に選ばれた名瀑・弘沢の滝があり、観光客の往来が多い立地だ。

石神井時代はサッカーと登山に熱中

石神井時代はサッカー部と山岳部に所属していた。「サッカーと登山が六対四の割合でしたね。黒崎先生が赴任された山岳部創設の頃で、同期の川崎伸君、岡村治明君らに四季折々あっちこちの山に連れていってもらったものです。石神井卒業後、私は理科大の山岳部に入り、川崎君は明大山岳部、岡村君は日大山岳部に入り、お互いに登山を競ったものでした。その結果、富士山や剣岳でそれぞれ遭難事故を体験し辛い思いもしたものです。

サッカー部は東京代表で国体出場するほど強く、石神井はサッカーの名門校と言われていました。朝鮮高校と東京都代表選を争って1対0で負けましたが、その朝鮮高校が全国大会で三位でしたから当時の石神井の強さがわかるでしょう」

サッカーと登山に熱中した三年間を評価され、卒業式では、「高校体育に貢献した」という安井都知事名の表彰状を松木校長からいただくという荣誉に

浴した。

「きっと顧問の東先生が東京都の上層部に働きかけてくれたお蔭だと思っています。サッカー部が強かったのでも、顧問の東先生も高く評価されていたから、それぐらいのことができたのでしょう」

卒業式で校長から直々に表彰状を授与されたのは全校でたった一人だった。素晴らしい石神井ライフだったのだ。

檜原村で木工の魅力を追いつける

理科大卒業後、日野自動車に入社し、トラック、バスなど大型車両の検査部門に長く勤務するが、羽村工場に転勤して初めて檜原村の魅力、木工の深い味わいに出会った。

元々、山好きだったが、檜原村が気に入った中嶋さんは村内に土地を借りてカナディアンシーダーハウスを建設し、村民との交流も深めた。サッカー部経験を活かして少年サッカーの指導まで手がけることになる。サッカー指導の結果は著しく、都大会の準決勝に進出するという成果を残した。これらの功績が郵便局移設に大きく影響するのだが、これは後々の話だ。

定年数年前のこと、日野自動車に「セカンドライフ休暇制度」が導入された。早期退職者が長期休暇をとれる制度で、給与の6割、賞与の2割が支給される。

「元々、工作が大好きで、子供の玩具なんかよく木工で作っていたものです。その上、檜原村で本格的な木工の世界に触れたのです。手作りの木工細工の魅力にはまり、定年退職後は檜原村の木を活かす仕事につきたいと思っていた矢先でした。ですから迷わずこの制度を利用することにし、長野県の専門学校で1年間、木工技術を学びました。寝食をとも



にする山岳部の合宿のような学習環境で、夜はもちろん酒盛りです。」

こんな矢先、檜原村から成人式のスピーチ依頼が舞い込む。新成人に少年サッカーの教え子が多いという理由だ。

この1時間のスピーチで中島さんは自身の「夢と青春」を熱っぽく語った。当時、村役場の前に建っていた郵便局舎はすでに使用されず、倉庫同然で近々取り壊すという噂までであった。実は中島さんは前から同郵便局のレトロなただずまいに大いなる魅力を感じていた。

「貴重な文化財ともいえる木造の郵便局舎を取り壊すのは実にもったいないことです。是非、自分が保存移築したいので、その移築の時は皆さんのお力をお借りしたいと言ってスピーチを締めくくったわけです。」

■ 村民の協力で移設計画進む

移設場所や移築に必要な道具の手配などなど困難を極める難題がいくつも想定された。ところが、少年サッカーなどで培った中島さんの人脈や人柄がこれら難題をことごとく解決してしまい、とんとん拍子に局舎の移設計画は進むことになる。

建設用地も移設道具も皆、村人の協力で事なきを得た。また村民には建設作業の専門家もいた。

中島さんは3カ月かけて 局舎をひとりで分解し、バス亭まではワゴン車に乗せて、車の入らない遊歩道は手押車で運んだ。建設用地は弘沢の滝に向かう遊歩道沿いの急傾斜地で建物を移設するには土地の整備が必要だが、これは前述の専門家が協力してくれた。

多くの人が協力してくれたが、それでも着工から完成までに1年間の年月を要した。当時57歳の中島さんにとっては、当然のこと大工事だった。「崖際の土地ですから、基礎工事が大変で、コンクリートパイル代わりに古い電信柱を数本買ってきて、これを柱にして建築しました。整地の際に10数本の杉の木を伐採しましたが、そのうちの一本は局舎の大黒柱として使用しています。」

面積は560坪ということになっていますが、山林の測量なんて杜撰なもので、実際には1200坪くらいあるでしょう。テラスをおりて沢沿いの斜面を散策すればワラビなんかがいくらでも採れますよ。」

実際にテラスから下りて斜面に立つと、ワラビが生えているのではないか。テラスからでもワラビがわかるほど山菜が豊富なのだ。

■ 檜材の木工品が並ぶ木工房

郵便局舎は二階建てだが、急斜面に建っているため、局舎の下が喫茶ルーム、その外側がオープンテラスとなっていて今回の取材の場ともなった。

一階部分は木工房で、檜材の積み木、美しい曲線の額縁、ふくろうの彫刻、自分のネームを入れられる表札、木靴などなど様々な作品が売り場に並んでいる。

「椅子、テーブル、ベッド、食器棚なども作っていますが、大抵は注文品なので工房には残っていません。二階がコンサートルームになっていますが、ここのスピーカーも手作りの木工製品です。そうそう、この天井の三角の梁ですが、これは分解せずにこのままワゴン車に乗せて運び、車道からここまではパワーカーで運んだんです。その他、色々な部材も手押しの搬送車やキャタピラー付きの車でズルズルと引きずって運びました」

二階のコンサートルームでは演奏会も開催され、その模様をテレビ局が放映したこともあったとか。

「檜原村の森林、木工細工は私にとってかけがいのない宝物です。その宝物を大切に守り、育てていきたいですね。木には独特の温かみがあり、手触りは優しいし、香りは癒し効果があります。その木の魅力を都会の人にも伝えていきたいという気持ちで工房を営んでいます。」

今は何を見ても、これは木でできないか、などいつも木工を念頭において物を見えています。ですから何を見ても新鮮です。そのせいか、気持ちも若返ってくるようです。実際、檜原村に来てからは風邪一つひきません。檜原村のお蔭、木工のお蔭です。ありがたいことです」

長時間の取材にもかかわらず、疲れた様子など微塵もみせず、精力的に活動する中島さんにとって「老い」は無縁のようで実に若々しい。それにしても、贅沢な空間、贅沢な生活、贅沢な自然環境だった。



(記／13回生Y.N生)



19回生の 大塚啓二郎氏が 紫綬褒章受章

本校19回生で現・政策研究大学院大学教授、I R R I (国際稲研究所) 前理事長の大塚啓二郎氏が2010年紫綬褒を受賞されましたので、同教授のインタビュー記事を掲載いたします。

好きなスポーツはバスケットで中学時代から熱中していました。余り強くない中学校でしたが、私が練習メニューを考えたりして、後輩を男女ともに地区優勝に導いたこともあります。石神井でももちろんバスケット部に入部しキャプテンも務めました。顧問の先生がアジア大会の審判を務めた清水先生で、先生には随分可愛がってもらいました。体育の時間にフォークダンスをする時など、女子生徒が不足すると先生がボクのパートナーを務めてくれるなどの特別扱いをうけたくらいです。

夏合宿の時など、清水先生は昼間から一升瓶を抱えてコート際に陣取っていましたが、お酒のせいか声が出ない時もありました。今では懐かしい高校時代の思い出です。とにかく高校時代はバスケ漬けでした。

勉強の方はあまりやったという記憶がありませんが、期末試験などまああの成績をとっていました。

北海道大学農学部に進みましたが、これは高3の時、受験勉強で読んだある論文がきっかけです。1964年にアメリカのライシャワー元駐日大使が書かれたもので、当時アジアが直面していた貧困、人口増加による食糧危機などの問題を取り上げて、「日本の若者はこの緊急の課題に挑戦してほしい」という内容でした。この論文にいたく感激し農学部を志望したわけです。

その北大ではボート部に入って連日、朝早くから晩までボートの練習ばかりし、ここでもキャプテンも務めました。バスケ、ボートなどスポーツで体力をつけたことと、キャプテンを務めたことが後々に役立ったと思っています。

実際に米国に留学して博士号を取得しようとした時は、朝8時起床、9時に学校へ行って授業を受け、

授業が終わると夜12時まで図書館で勉強して帰宅、シャワーを浴びて、午前1時に就寝という生活を364.5日くらいやりました。

毎日100ページくらいの原書を読む生活です。成績が悪ければ落第は必至です。結局、当初いた60人のうち、博士号を取得できたのは15人だけでした。バスケット部、ボート部で体力を養ったお蔭で過酷な勉学生生活を乗り切ることができたと思っています。スポーツに感謝ですね。

ちなみにアジアの食糧危機は、後に「緑の革命」とよばれるイネの多収穫新品種が開発され、生産量が増大したことで救われました。私は成功の本当の鍵は世界屈指の農学者がこの時アジアに結集して真価を発揮したことだと考えています。北大の田中明博士をはじめ素晴らしい学者が結集し、そしてアジアの優秀な若い人材が育ってくれたことが大きいのです。

地球規模で食料増産は大きな課題ですが、アジアの次はアフリカの食料増産が急務です。アフリカの食料増産を成功させるためには単なる農業技術の向上だけでなく、地域経済の発展、人材育成、I R R I (国際稲研究所)、世界銀行、J I C A など様々な組織との連携プレーが必要です。つまり、色々な分野の優秀な学者とのコラボが欠かせません。そういう意味でI R R I、世界銀行、J I C A、財務省、外務省などで過去に培った人脈を粘り強く駆使して働きかけるボクの仕事の進め方は重要なのかもしれません。

単著の『消えゆく森の再生学』をはじめ、共著、共編著、編著などの他、国際的学術雑誌での発表論文が94本という記録が私にはあります。普通の学者は生涯で5冊も本を書けばいい方ですから私の場合、異常に多いかもしれません。

論文の中でも共著、共編著が多く、他の学者との共同研究というチームワークが多いのですが、これは部活でキャプテンを務めた時に仲間の力をいかにしたら結集できるかに苦労したことが実を結んだのでしょう。実際、仲間の力を結集するには、気遣い、気配りが必要ですから。

今回の紫綬褒章の受賞を聞いた時、どの論文がヒットしたのかな、どの論文がホームランだったのかなと考えたものの、思い当たる論文がありません。きっと選考に当たった方々は私の体力、ネットワークにご褒美をくれたのでしょう。

最後になりますが、アフリカのケニアやセネガルでは米の増産に成功しています。気候、風土、水資源などに恵まれているからですが、実力のある学者をアフリカに結集すればアフリカでの食料倍増も夢ではありません。ライシャワー博士ではありませんが、私だけでなく「日本の若者にこの緊急の課題に挑戦してほしい」ものです。

大塚啓二郎教授

【専門分野】

開発経済学

【学位】

Ph.D.（経済学）（シカゴ大学）

【略歴】

1971年北海道大学農学部農業経済研究学科卒、74年東京都立大学社会科学部研究科修士課程修了、79年シカゴ大学経済学研究科博士課程修了、同年エール大学経済成長研究所ポスドクトラルフェロー、80年東京都立大学経済学部講師、81年同助教授、86-89年国際稲研究所客員主任研究員兼任、91年東京都立大学経済学部教授、93-98年国際食糧政策研究所客員研究員兼任、2001年本学連携教授、03年F A S I D大学院プログラムディレクター、10年政策研究大学院大学教授。I R R I（国際稲研究所）理事長（現在に至る）。

【現在の研究対象】

1. アジアとアフリカの産業発展パターンの比較研究
2. アジアとアフリカの貧困問題の研究

注／田中明博士／作物育種の基本は、背を低く、茎を太くして穂が重くなっても倒れないような品種を開発することで、明治以来、日本ではこの方針に則って品種改良してきました。熱帯地帯でも、背が低くて茎が太い水稻品種を開発すべきであるという I R R I の研究の基本方針を示したのが田中明博士。

（記／13回生 Y.N生）

事務局便り

会費納入のお願い

会費は年2000円です。

同窓会活動は多くの方々のボランティアで支えられていますが、広報誌『きずな』の制作、発行、学校援助のために、是非会費を納入をお願いいたします。今回の東北大震災でも、きずなの大切さが多くの人々を勇気づけました。私達の大切な石神井精神を後世に繋いでいく為にも、会費はどうしても必要不可欠です。重ねて、会費の納入をよろしくお願いいたします。

会員情報、住所変更、同窓会への問い合わせ先

都立石神井高校同窓会事務局

〒164-0002 中野区上高田1-14-7（石神井倶楽部）

Tel&Fax 03-3319-1112

ホームページからも住所変更、情報提供、問い合わせが可能です。

ウェブきずな <http://www.shakujii-club.gr.jp>

同窓会活動参加者募集

年齢を越え、いろいろなジャンルの人々との出会いがあります。

今までの経験を生かすかわり方もあります。

興味のある方は、上記事務局にご連絡ください。

ホームページからも問い合わせ可能です。

沢山の方々の参加をお待ちしています。



「雨引の里と彫刻展2011」を鑑賞

平成23年3月29日

(文責 諏訪 喜代志)

早春の筑波路を走る。借りた中古自転車は、快適とは言い辛いですが、広い農道は整備されており、車も少なく、風も無く、それ程の寒さでもない当日3月8日は最高のサイクリング日和となりました。

遠く筑波山、加波山の山々が春霞に浮かんで見え、素晴らしい田園風景が視界いっぱいに広がっています。乗り手の12名は、大半が古希を迎える年代ですが気持は、すでに「青い山脈」の自転車並走シーンへタイムスリップ。

誰が池辺良で杉葉子かは問いません。同期二郎君の作品の前では、いつものように議論百出。昼食は、バス組と合流し、野辺の楽しい会食となりました。

さて、「雨引の里と彫刻展」は、今回で8回目の開催ですが、第一回展は平成8年春に始まりました。筑波山麓に広がる茨城県桜川市雨引きの里と彫刻家グループを結びつけたのが我々同期である都立石神井高校12期生の彫刻家菅原二郎君です。

東京芸術大学大学院を卒業後、永くイタリア政府招聘学生としてミラノに留学され、内外の彫刻界で活躍中です。現在、大阪芸大で教授として教鞭を取られています。

同君から、桜川市での野外展示は、順調に始まった訳ではなく、地元の住民に受け入れられるにはそれなりの時間と努力が必要であったと苦労話をお聞きしましたが、現在の成功は、あくまでも彫刻家グループの自主運営を目指したというコンセプトと中年彫刻家グループの情熱が理解されたからでしょう。

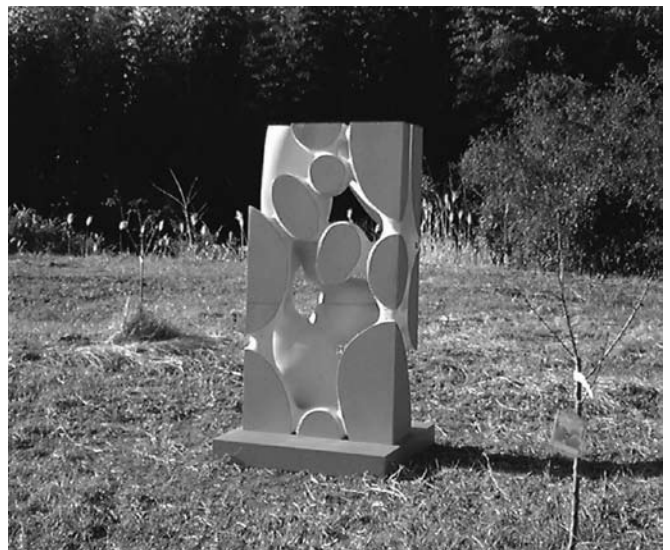
その後同展は、新聞、TVでも取り上げられ、地方自治体、民間の財団なども支援を始め、結果、地域起しへ多大な貢献をしました。

今回は、「2011冬のさなかに」をサブテーマに作家42名が参加、1月15日から3月21日と約3カ月間の開催となりました。我々12期生は、夫婦5組

を含め総勢27名、東京からバスを仕立て、雨引の里を目指しました。会場は広大な田園に42の作品が自然を背景として設置されています。行程17キロに及びますのでバス組みと自転車組に分かれての鑑賞となりました。バスツアーは、酒井秀彦夫妻のご尽力によるものです。大変有り難う御座いました。

私も含め、同期の仲間がどれだけ作品を理解したかは永遠の謎ですが、何かを感じればと思います。兎に角、昔の仲間と広大な田園を散策する機会を与えていただいた二郎君とその仲間達に感謝の気持ちでいっぱいです。

それと今回は嬉しいことがあります。二郎君の長男隆彦氏が参加され、作品を披露されたことです。鉄を素材とした力強いオブジェでした。偉丈夫でなかなかのイケ面で参加のご婦人の方の注目の的でした。多分次回女性参加が増えそうです。帰路は、有志が余韻を楽しむため、青山の同窓会長城君の店で二郎君も含め大いに盛り上がりましたことをご報告しておきます。



東京校歌祭に参加しましょう!!

日 時：2011年10月1日土曜日午後1時開演

会 場：日比谷公会堂

集 合：午後1時正面階段付近です。(同窓会の旗が目印)

石神井の出演時刻は、午後2時30分頃の予定です。

石吹OB、現役生徒とともに、旧十四中校歌、現在の校歌を熱唱しましょう!

同期の仲間、ご家族を誘ってご参加ください。

終了後、懇親会を開催します。

懇親会場は、石神井倶楽部(レストランあおしま内Tel03-3403-3461)

青山一丁目下車0番出口すぐです。



写真は昨年の参加風景です。

ここに巨星あり 古在由秀群馬天文台長面会記

I・I・S(高8回)

群馬天文台長が石神井高校出身と同期生から聞き、昨年暮、上州に遊びに来た友人二人と登山姿で「天文台長にいざ見参」した。台長室での開口一番「この室に登山靴で入ってくるとは」だった。

お会いするのが現役天文台長だから、40~50代の現役バリバリと想像していたが、現れた方はなんと石神井中学1回生で御歳81歳の大先輩だった。

大先輩の話は、昔のただ広い石神井の校庭の思い出や、母親一人で苦学していた頃、恩師の紹介で天文台の助手になった話、田中角栄が総理大臣になってから、若い頃世話になった処に予算を付けたこと、石神井高校出身者に大蔵省次官になった人物がいたこと、三鷹の天文台付近も随分変わった、などなど世間話に花が咲き、アッと言う間に50分あまりが過ぎた。

実はこの時点では古在台長が天文学博士で文化功労者を受賞された天体力学の世界的権威者だったことを迂闊にも知らず、話の合間に聞き及んだ次第だった。

この群馬天文台は群馬県人200万人達成記念に始まり、平成9年4月、古在さんが台長に就任、以来、今日まで14年間、日本列島の中心地から天文観測の指揮をとられたという。幸いにもお目にかかれた日は週一回の東京から一泊二日の出張勤務の日であった。

台長室を辞して館内を見学すると、あの伊勢神宮の御祭神である天照大神様の太陽が1mの大きさでテーブルの上に投写されている。1cmほどの地球の図案を重ねて「これが地球でお母さん星の太陽をぐるぐるとあんな遠くで回っているんですよ」と係員が説明してくれた。太陽の黒点も初めて見た。壮大な

天空の話は世俗を忘れた一時だった。

この日の圧巻は望遠鏡の中で一番大きな150cmの反射式望遠鏡だった。16億円の巨費を投じて現代科学の最高技術を結集したもので、465mのドーム中心に王様のごとく鎮座していた。

一時の説明の後、研究員が「ドームも動かしてみましよう」といい、丸い天井の円筒のドームが望遠鏡を中心にゆっくりと動き始めた。これは凄い感激で鈍くなった老人の心を揺さぶり充分に感性を活性化された。

天文台に40億円という巨費を投じた行政の見識の高さを元公務員の友人は感じたかもしれない。元テレビ局技術部の友人は映像機器の素晴らしさに、元三流会社勤務の身にはお金の威力を痛感し、使い方によってはお金は未来を開く宝物になると感じた。

見学を終わっての3人の感想は、「天文台の私たちは皆いい顔しているなあ」であった。大先輩ありがとうございました。



みとも たえこ ソプラノ 御供 多恵子リサイタル・ピアノ伴奏 山田 彰一

日時：2011年8月14日(日) 15:00開演(14:30開場) 後援：スペイン大使館
会場：三鷹市芸術文化センター 風のホール(三鷹駅南口よりバス「八幡芸術センター」「八幡前」下車)
〒181-0012 三鷹市上連雀6-12-14 電話0422-47-9100
会費：全自由席4,000円(当日券有) お問い合わせ 電話04-2944-2830 (Mitomo)
曲目アヴェマリア特集・子守歌・スペインの歌 他オペラマリア
CD「オマージュ・アたくみ」ソプラノ御供多恵子2,500円銀座山野楽器本店2Fにて販売中
当日、会場にて、スロバキアで録音のCDも合わせて販売 (高校15回生)

〈東日本大震災 特報〉

被災、家屋全壊、「津波から愛犬が救った二つの命」

鈴木 良一 (高13回)

東日本大震災の津波で石神井13回生・鈴木良一君の家屋(仙台市若林区荒浜新)が全壊してしまいました。本人と愛妻、愛犬は幸いなことに当日は車で外出していて、出先で地震、津波発生を知ったので命に別状はなく、同市の蒲町小学校の避難所に夫婦で避難しました。

当分は仮設住宅暮らしが続くこととなりますが、大変な被害を被った鈴木良一君の生活支援をしようと多くの13回生が義援金を良一君の銀行口座に振込み始め、すでに総勢70人近くが振込完了しています。

卒業50年目の節目の年に同期生の「絆」がしっかりと結ばれたわけで、石神井を卒業して良かったと思う今日この頃です。以下、津波襲来の際の緊張感溢れる良一君からのメールご披露します。

★何故仙台の荒浜を終焉の地と選んだのか？

数度にわたる仙台赴任で仙台は私にとって第二の故郷になり、仙台の湘南と言われる荒浜を我々夫婦二人の最後の楽園として選んだ。夏は松林を涼しい浜風が通り抜け、冬は市内中心部と比べ2～3度暖かく、雪は積もってもスズメの三里(お灸のつば)程。サーフィン、山菜摘み、きのこ狩りOK、近場に馬術クラブ、スキー場、温泉あり。孫の遊び場に苦勞無し、余生を過ごす場所としては文句がない。

★地震、津波の時何処にいたか？

3月11日は愛犬バロン君(シーズ犬、13歳)の目の治療予約日で、女房、愛犬バロンの3人で動物病院へ行き、治療が終わって、昼食の食料買い出しでスーパーへ寄った時の車内でマグニチュード9、震度7(若林区一部地区では)の激震に遭遇した。

車は上下左右に揺れ、店のガラスの割れる音、男女の悲鳴、電柱は大きく振り子のように左右に振れ今にも車に倒れ込んで来るかのようだ。愛犬をしっかりと抱え込み、知らずうちにブレーキを力まかせに踏んでいた。店内のお客、店員は店から這って逃げて来た。長い縦揺れ横揺れだった。カーラジオでは津波は40～50分後とのこと。地震にあったスーパーから自宅までは10～15分位のところだ。即座に自宅まで行けると判断し、大事袋を取りに家に戻った。

近所の人達は逃げるかこのまゝいるかの判断に困惑しているようだった。チリ沖地震の大津波警報が狼少年だった経験もあり、たいしたことはあるまいと思ってた人達が津波に吞まれてしまった。

★海から真反対、西へ進路を取る。

お向かいの大学受験生のお嬢さんがオロオロしているの車に乗せて、海と真反対の道へ走る。車の後ろ500～600mには家、ガレキを飲み込んだ真っ黒な津波が迫ってくる。数台後ろの車がクラクション、ライトパッシングで早く行けと知らせる。前の車が分かったのか一斉に速度が速くなる。

どす黒い津波に追われ無我夢中で車のアクセルを踏み込む。頭は瞬時に判断していた。海から真反対、西へ進路を取れと！東部道路を越せと！海と平行して作られている東部高速道路が堤となりこれが津波を遮ってくれると頭が命令していた。後ろの席にいる女房は悲痛な声で『速く！速く！津波よ！津波！』。左右に逃げる車があったが多分吞まれているだろう。

東部道路下のガードをくぐり抜けた。電柱が横にかしげ、今にも倒れそうだ。垂れ下がった電線をかき潜り、道路の陥没を避け、自衛隊『霞目飛行場』に向かった。ここら辺りは海岸から多分3km位だろう。

後で聞いた話だが、1600年代の慶長の津波はこの辺りまで押し寄せたようで、この時建てられた神社が『波分け神社』の名前で残っているそうだ。今回の津波は東部道路が防潮堤の役目を果たしこの道路で10mの津波が止まったと考えられている。

自衛隊基地脇の道に出ると渋滞で前に進まなくなった。燃料計を見ると警告ラインが赤だ。右手に若林郵便局の駐車場を見つけ仕方なく一時避難をせざる



仮設住宅で

るをえない。郵便局は鉄筋3階建だ。ここまで津波が来たら愛犬を抱え、女房の手を引いて3階へ駆け登ればよいとここに居残りの覚悟を決めた。雪がチラチラ降り、日が沈み車窓からは周りの景色が霞み始めてきた。

★ガソリン切れの寒い車中で一晩すごす。

ちらつく雪の中エンジンをかけ暖を取りたくともガソリンはなく、危険を冒し家に戻って持ち出したコートを着込み、靴下を履いてない足をズボンの裾に包み込み寒さを凌ぐ。女房は後部座席でバロンを抱っこして同じことをしている。寒い長い夜を震えながら不安に過ごす。

トイレはもちろん駐車場だが、さすが女房は外では嫌だとバロンのオシッコシートをゴミ捨てのビニール中に敷き車の後ろで器用に用をたす。車の窓はちらつく雪で凍てつき外が見えない。老いてこの寒さはきつい。携帯電話は通じない、暗い中メールを打つが電池が切れる。無事を知らせる方法が無くなった。

ウトウトするうちに長い夜が明け昨日と変わり車の通りが少ない。ガソリンはレッドラインだが、少なくとも50kmは移動ができる。これだけ走ればどこかで給油ができると判断し郵便局を出た500～600円。

あら～！こんな近くに避難所があったとは！蒲町小学校だ。校庭は避難者の車で溢れ、校舎内は教室に毛布を敷いた避難者が溢れている。ここまでは津波が来ていない。教室は満杯なので、仕方なく3階の廊下に陣取る。被災者のオバチャンが親切に被災者用の毛布を持って来てくれた。彼女も愛犬同伴だが犬が吠えるので車に置いているらしい。有り難く廊下に毛布を引き3人肩を寄せ合い一泊する。思いきり足を伸ばし、廊下といえど壁があるのは何と暖かいことか。

昨日のオバチャンが2階の教室に空きスペースがあると知らせてくれた。そこに一泊した。1階低いのか3階より寒い。翌日体育館が地震の影響を受けていないとのことで体育館へ移動命令が出た。ただペット同伴は2階体育道具置場、身障者同伴はその隣の家庭科教室へ移動する。

水道、電気が止まっているので夜は体育館の自家発電器が活躍する。運動場にはビニールレザーの男女兼用仮設トイレ5基が設置され、灯油ストーブが体育置場に入った。

★バロンは賢く吠えずに静か

バロンは親の苦しみが分かってか他の犬が吠えても親に迷惑をかけてはいけなさと毛布の上で静かに寝ている。ペット同伴室には8家族18人。インコが1羽。犬が9匹。猫はいない。多分地震で残った

家にいるのだろう。

起床は6時。朝食は6時半。体育館へ取りに行く。今日はセロファンに包まれたアンパン一人一個。ペットボトル一本。昼は町内会炊き出し。温かいご飯にタクワン二切れ、味噌汁。温かい食べ物のアリガタヤ！アリガタヤ！何と美味しいこと。

この避難所でいろいろ人々との出会いがあった。地震という共通の意識からお互い助け合いの心があり、感心にも被災者同士の言い争いを見たことがない。

奥さんと子供が津波に吞まれ、奥さんは見つけたが今なお子供を探しているという初老の男性は、重油がなく奥さんを未だ火葬してやれないでいるという。この夫婦は2台の車で逃げた。奥さんの車は津波に追い付かれ飲み込まれた。彼女は『さようなら』を言うかのように旦那さんに向け目一杯クラクションを鳴らし続け沈んでいったという。

疲れはてた様子の若い女性が必死に避難所で声をあげ『荒浜に住んでいた人はいませんか』と探している。「どうしたんですか？荒浜ですが」『30歳の男性なんです、町内の消防団員で×××という名前なんです。知りませんか？』彼女の婚約者だそう。「この避難所より七郷小学校のほうが荒浜地区の避難者が多いらしいですよ。何か情報があれば聞いておきましょう」。

数日してその婚約者が訪ねて来た。彼は避難するよう消防車で町内を最後まで走り回って津波に吞まれたと彼女から聞いた。泣きながら我々にお礼を述べる彼女の姿に我々は、ただただもらい泣きする以外に慰めの言葉を何もかけることができなかった。

自然の凄さ、恐ろしさをまのあたりに経験し、かろうじて生き残った私にこの地震、津波は人間へのおごり、不遜そして自分の今までの愚かな人生への鉄槌だと理解します。石神井13期生皆さんからのご支援、ご厚情、励ましの言葉を沢山いただきました。そしてまとめ役をしていただいた野中君に深く感謝いたします。本当にありがとうございます。

皆さんの励まし、応援により今生かしていることを肝に命じ、これからの残りわずかな人生を何とか出直していきたく考えています。ありがとうございました。またこの地震津波でお亡くなりになられた方々のご冥福を心からお祈りして合掌。黙祷。

(記／13回Y.N生)



愛犬バロン君

東日本大震災 20回生松谷修一君の震災レポート



3月11日、東北地方を襲った巨大地震・・・
 そうだ仙台に松谷君が居る・・・安否は？
 私達20回生は、メールでやっと18日に無事を知りました。
 以下、本人からのメールです。
 今後、役に立つ経験談ですので、本人の許可を得てご紹介します。

皆さん大変ご心配をおかけしましたが、家族全員無事です。

今日18時にやっと電気が使用できるようになり、海神の母親に無事の電話をしたところ中津川から電話があった旨聞きました。(携帯も電池切れでした)

とにかくすごい揺れで地震発生直後から電気・ガス・水道のライフラインは全て停止。

煮炊きはガスコンロ・ガスボンベ(地震に備え6本在庫があった)、暖房は家内が捨てると言ったのをむりやり保管していた石油ストーブ(灯油はたまたま前日にファンヒーター用にポリ2缶購入)、飲料水は同じ団地内で水が出ている家から貰い受け、その他の生活用水は地震に備えて保存していたポリ2缶を使用。今日からは飲料水・生活用水とも近くの館中学校で給水を受けています。

ガス・水道の復旧はいつになるかわかりません。

車もたまたま前日にガソリンを満タンにしていたおかげで助かっています。

食料等はとりあえず家にあるもので対応していますが、買出しは近くのイオンスーパー・生協で4時間並んでやっと購入している状況です。(みんな我慢強く、文句もいわず、整然と並んでいます。暴動・奪略が起きないところが素晴らしいです)

地震発生時私は宮城県図書館3階で4月から参加するボランティア業務の説明を受けていて、ちょうど書架の間に立っていたのですが、地震発生と同時に書架から通路に逃げ、間一髪で本に潰されずにすみしました。床に座っていても揺れがひどく建物が倒壊しなかったので助かりました。(トイレにいらなくてよかった)

家内と娘は泉中央駅近くのイトーヨーカ堂で買い物をして建物を出た瞬間に地震にあい、地面に座り込んでまったく身動きができず、もうおしまい

かと思ったとのこと。

携帯で二人の居場所を確認し、図書館から車で、信号がすでに全部消えている道路を、恐怖の中で運転し、無事二人を拾い帰宅しました。(ドライバーは信号の消えた交差点で1台1台譲り合いながら交互に通過していました。)

長男が一人自宅におり、パニック状態でしたが無事でした。

被害は食器棚のガラスコップが4ヶ落ちて割れた程度で済みました。(家具等は倒壊防止のポールを家具と天井の間に設置してあったのが効果がありました。)

照明器具は吊り下げタイプのものは落下していたため、落ち着いたら天井はめ込み式に交換します。やはり普段から防災グッズを備えておく必要性を強く感じました。我が家はおかげさまである程度そろえていたので助かりました。

電気・ガス・水道がまったく使えない状況を考えて何が必要かということです。

乾電池・懐中電灯(手動発電式があったので非常に助かった)・ラジオ(これも手動充電式があったので非常に助かった)・ポリタンク(水・灯油)・ガスコンロ・ガスボンベ・石油ストーブ

電気が止まると何も使えないのが現代の生活です。やっと電気は使えるようになり、暖房も使用でき助かりますが、水道・ガスはいつになるかわかりません。

まだしばらくは不自由な生活が続きます。

11日の夜は雪が降りました。12日以降は明るい月の光がまぶしく、夜空には北斗七星・北極星がきらきらと輝いています。

東北の太平洋沿岸はほとんど壊滅状況です。

毎日余震が続いており、夜もなかなか眠れませんが、今家族全員無事でいられることを幸せに感じています。

2011年3月18日

傘寿同期会

真家 俊雄（高1回）

母校の発祥地は東京青山ですが現在の石神井に新校舎が出来て間もない昭和18年私達は旧制石神井中学に入学し、戦中戦後の6年間を軍事教練や軍需工場動員も体験しながら戦後の混乱期へと共に学び、旧制中4回、新制高校第1回の卒業生となりました。卒業後は夫々の分野で戦後の日本復興・高度成長に携わりこの春には全員80歳を越す文字通りの高齢者となりました。

大半が現役を退いた70歳のとき「古稀同期会」と銘打って以来1年半ごとに定期的に春秋同期会を重ね、この5月には「傘寿同期会」を行いました。年々健康を害して出席が難しくなったり、伴侶を失ったり、残念ながら亡くなる同期生も目立つようになりましたが、今回の「傘寿同期会」には約30名の出席があり、95歳で益々お元気な寺島先生と同窓会でご活躍中の勝見副会長を囲んで歓談は尽きることなく大いに旧交を温めることが出来ました。

世間一般の風潮からこの辺で最後の同期会になるかもしれないと世話人一同密かに案じておりましたが、80歳は通過点、遂に次回来年の日程まで決めてしまうほどの盛り上がりで旧校歌「芳春に出て魁けん白梅の蕾と薫る男子我・・・」を合唱し青山での再会を約しました。

最後の二人まで集ろうという私達です。こんな老友達こそ「きずな」の象徴かと自負しております。母校の皆さん、同窓のお若い皆さんもこんな石神井健児の絆が半世紀を超えて続いていることをご紹介し母校と同窓会のご繁栄を祈ります。次回同期会は平成24年10月13日（土）に青山の石神井倶楽部（あおしま）で行います。以上
同期世話人：飯倉豊司・岡本磐男・村瀬善久
吉田 卓・真家俊雄



図書館焼失の謎

昭和38年2月7日早暁、石神井高校は炎に包まれた。

水曜日の朝、そろそろ起きなくてはと思いながらも床の中でぐずぐずしていると、階下から父親の声がした。「おい、お前の高校が燃えてるぞ！」慌てて階段を降りて食堂に行きテレビを見ると朝のNHKニュースに燃え盛る石神井高校が映し出されている。アナウンサーが出火元は図書館らしいと言っている。朝食も摂らずに駅まで走り電車に乗った。老朽化した木造校舎、その中でもぼつんと離れて建っている図書館、近々建て直しの予定、生徒の居ない早朝の出火、様々な思いがまだ働きの鈍い頭の中を駆け巡る。

学校に着くとすでに鎮火はしているものの学校の周辺は騒然としている。校舎から渡り廊下を渡って行く図書館は、誰にも迷惑を掛けないように気遣いしたかのように独りで焼け落ちていた。

当時生徒会長であった私はH校長に校長室に来るように呼ばれた。部屋に入るとH校長は疲れた顔の中に幾分戸惑いの表情を浮かべているように見えた。「君は生徒会長だね」と確かめるように切出す校長。はい、と答えると幾分ためらうようにこう続けた。「その内、君のところにも消防や警察から何か訊いてくるかも知れないが、ただ何も知らないとだけ言っておけば良いからね。まあ、実際何も知らないだろうけどね・・・、私と同じようにね」勿論、何も知らない私は、はい、とだけ答えて校長室を出た。廊下を歩きながら考えた。なぜ校長はわざわざ俺を呼んであんなことを言ったのか。その途端いくつかのキーワードが脳裏に浮かんできた。別棟、延焼の危険がない、建て直し間近、早朝、火災保険、・・・。

その後勿論、頭に浮かんだアノことについては一切口外していない。そして時を経ずして立派な鉄筋校舎が建った。(TOMMY)

校友会誌『澄心』の記事から

佐藤 健 (高3回)

戦後間もなくは、都立校生徒というプライドが生き残っていた時期でもある。誰もが背伸びして個性を発揮しようとした。人は皆、背伸びしなければ進歩しないのである。

昨年の本誌に旧制中学時代に刊行された校友会誌「澄心(ちょうしん)」の名称をめぐる出来事を述べた。今、手元にある第3号(戦後復刊第1号、昭和22年4月発行)を見ると、あの戦後の混乱期に、中学生がこれほど見事な誌面を作り上げたのかと思わざるを得ないのである。

構成は巻頭言から始まって、校長挨拶、随想、詞章(作文・創作)、特集記事(新卒業生文集)、部活研究報告、雑報と、これは型どおりであるが、目を引くのは、その文章力、表現力の豊かさである。

紙幅の関係から、ほんの一部分を紹介するにとどめるが、たとえば「常雄の心理」という小塩節(3年)の文章は、運動会だ学芸会だと浮かれている友人たちに、何となく溶け込めない主人公の苛立ちが上手に描写されており、しかも最後になって、それが夢であったというドンデン返しの落ちが用意されている。これはO・ヘンリの短編小説の手法であり、これが中学生の書いたものかと疑いたくなるような手際の良さである。

私はこれを読んで、昭和21年の学芸会を思い出した。当時母校には講堂がなく、大泉学園にあった師範付属小学校の講堂を借りたから、全校生徒総動員で椅子や机を運んだのである。今なら、学校の器物を勝手に持ち出したとして騒ぎになるような話である。

「うめ」という表題の飯田稔(5年)の文章は5頁を使う大作で、原稿用紙11枚、よくぞ息の長い物語をまとめたものと驚嘆してしまう。単に分量だけではない。内省的な筆致の中に当時の社会問題まで取り入れた内容になっているのだ。中学5年は今の高校2年に相当する。現代っ子にこの作品に肩を並べ得る文章が書けるだろうか。

「小窓」という表題の野田文治(2年)の詩は、通学の途中で毎日出会う幼児との心の交流を題材としたもので、中学2年生がこういう発想を得るだろうかと思いたくなるようなレベルのものである。

当時、私は澄心に載った作品を見せられて、自分には逆立ちしても及ばないと劣等感に苛まれたものである。

「研究」というコーナーでは数理統計班の活動が報告されている。今でいう部活というものだろう。中でも特に面白いのは大河内信男(4年)の「血液型の統計」というレポートである。今でも血液型による性格分類を好む人が多いが、すでにそれを先取りしたような内容で、結論として4年2年は内気でおとなしく反省的であるのに対して、5年3年1年は暴れん坊で進取的かつ好き嫌いははっきりしていると仕分けしているのである。昨年の本誌で述べた5年対4年の棒倒し遺恨試合も、その根源は血液型のなせるわざだったのだと、今になって気がついた。

最後に、私にとって最も印象に残る作品を紹介しておきたい。短い詩であるから全文を掲げる。石島篤(2年)の作品である。

「空と一緒に」

停電が毎日のように起る
空襲で家を焼かれ、そして
どんなに物価が高くとも
いくら物に困っても
太陽と
あの輝く大空は
昔も今も永久不変だ
鉛筆ノートが足りなくても
青空に指で数えて
僕は空と一緒に勉強するんだ

戦後の混乱期、みんなボロボロの服を着て、腹を空かしていた。ただ、空だけが青々と美しかったことを思い出すのである。

筆者注 文中敬称略(学年は昭和21年度の旧制中学の年次を示す)

石神井エイト会・囲碁キチクラブ紹介

今井 正武（高8回）

昭和31年に卒業した我々高校8回生は、なぜか他の学年の同期生に比べて親密度が高く、55年を経た今でも、年一度の同期会に男女併せて約50人近い懐かしい顔ぶれが、大阪や群馬からも駆けつけてくれるから嬉しい。2,3時間のパーティがお互いの楽しい話に華咲いて、アッという間に終わってしまう感じである。

その中で囲碁の仲間とゴルフの仲間は、それぞれ数ヶ月に1度の頻度で会い、力を戦わせている。戦い終わったその後は、囲碁をやらない仲間も呼んで、冷たいビールに喉を鳴らしながら、囲碁の話し或いは石神井時代の話に、笑いとお喋りが止まらない。ここではそんな碁キチグループがあることを紹介したい。

まだまだ探せば囲碁同好の士は沢山出てくると思うが、今のメンバーは段位順に、本郷君（9）を筆頭に、野口（6）、山崎（6）、今井（6）、今泉（5）、安村（4）、山田元一（2）、江頭（初）の諸君である。悲しいことに昨年4月平野亮三君（2）が他界した。その葬儀のお棺の中には日本棋院囲碁段位認定書がそっと添えられていた。

筆者が囲碁を始めたのは大学に入学してからだが、石神井の頃はまったく知らず、本郷君が時折先生を相手に4子くらいの石を置かせて、偉そうに打っていたのを思い出す。上記の段位を比べてみると、9段格のH君から初段のE君まで、長い囲碁キャリアの中でこのような差はどのようにして生まれるのか興味深い。メンバーの数人に始めた年、きっかけなどについて聞いてみたので紹介する。

囲碁のみならず、音楽、スポーツの世界でも、語学も？幼児教育というか、若いころに始めた時期が、どうも最終棋力に関係しているように思えてならない。プロの棋士の年齢制限もそういう意味合いがありそうだ。韓国、中国のプロ棋士養成は明確に若年層に絞っている。我々の碁キチの中、H君は小学5年のころ級位者の祖父から手ほどきを受けたという。

囲碁の家庭環境に恵まれるという幸運もH君の場合大きかった。高校生のころは恐らく2,3段はあったに違いない。またH君の場合、社会人となって木谷会、坂田会という第1級のプロ棋士の碁会に入門したことが、今日のアマチュア界の上位グループに入れる棋力となったものだろう。我々6段格の3人が「今度こそ」「今度こそ」と3子で挑戦するが、めったに勝たせてはくれないのだ。N君、Y君そして筆者の3名はほぼ同格の棋力だが、お互いに「あいつだけには負けたくない」と心の中で念じているのが、お互いに分かるだけに面白い。N君は4歳ころに近所のおじさん達の縁台囲碁を眺めて覚えたという。かなりの知力である。彼はその後サラリーマンになるまで全く碁と縁がなかったために、惜しいことに6段格で止まってしまった。然し、5段は多いが6段という段位はそう多くない。多くの人は大学に入って、または社会人になって囲碁でもやろうかとか、または考えるゲームに興味を持つようで、囲碁部でも入って格別の訓練をすれば、7,8段位に行けるようだが、我々の時代は学生＝マージャンの時代で、Y君（2）はそちらに惹かれたという。上記I君やY君（6）、筆者などは幸い教えてくれる人に恵まれたようだが、当時囲碁への傾倒するエネルギーが、他の興味に引かれたとっていいかもしれない。

E君は地域社会の方々との触れ合いの大切さに囲碁の魅力にはまり、大変なスピードで強くなっている。Y君（4）は医者仲間打ってきたようだ。囲碁への情熱は高い。少年期から青年期に覚え、傾注した棋力は、後年アマ・トップ級になる可能性を持つが、老年期に入っても囲碁の底知れぬ面白さに、脳神経を活発にし、勝ったときの無上の喜びは、若さを引き寄せる素晴らしい頭脳ゲームである。

石神井エイト会囲碁キチ会は誰でも仲間にお迎えしますのでどうぞご連絡ください。

手崎政男先生ご逝去



手崎政男先生、昨年10月に開催された中学1回生と高校7回生の二つのクラス会に二人のお嬢さんの介添えで元気にご出席されましたが、本年3月27日、心不全でお亡くなりになりました。享年96歳でした。

先生は昭和15年から昭和32年まで石神井で国語の教師をされ、その後、富山大学教授を定年まで務め、定年後は鶴見大学女子短期大学部教授ならびに図書館長をされてきました。また永く石神井高校のPTA会長も務められ、95歳の年には「通説方丈記」を笠間書院から上梓されていきました。合掌。

水谷英一郎先生ご逝去

2011年3月29日胃がんのため85歳で逝去されました。昭和22年～60年まで在職し担当教科は理科、生物部顧問もされ、黒菱山荘にも深いかかわりがありました。ご冥福をお祈りいたします。合掌。

第18回東京校歌祭に参加しました

石神井高校同窓会は「東京校歌祭」（主催：東京校歌祭振興会）に第3回から毎回参加しています。

平成22年10月2日、日比谷公会堂で行われた「第18回東京校歌祭」（主催：東京校歌祭振興会）には、17の高校に特別参加の東大、一橋大を加えた計19校が参加。石神井はその冒頭を飾り、OB、現役で構成するプラスバンド「石吹」の力強い演奏をバックに過去最多の45人で校歌を熱唱し、素晴らしい時間を過ごすことができました。

本年は、10月1日に開催予定です。さらに多くの方の参加を期待しています。校歌祭終了後には楽しい懇親会も開催しますので、奮ってご参加ください。

「お若い」のおだてに乗って

鬼澤 英雄 (高8回)

この原稿の発送寸前で「東北関東大震災」にぶつかりました。ここ茨城の龍ヶ崎市でも頻繁に余震が続き、被災地の悲惨な映像も恐ろしく、天災とは言えまったく気の毒です。

昨年は、同窓会総会のほか創立70周年記念もあって母校訪問はにぎやかでした。

新装なった校舎は気分がいいし、創立記念の式典中も生徒席の近くに着席の椅子が用意されていて、いっしょに祝賀を味わいました。その間も静粛な雰囲気を持続されたのには感心しました。式後に武蔵関の駅前にある馴染みの蕎麦屋で、仲間たちと定番のお湯割り焼酎コースを楽しみ、古き木造2階建校舎時代の恩師の昔話を肴に盛上がりしました。

8期生の年間の報告もほぼ例年通りで、ゴルフの「牛歩の会」(昭和12, 13年の丑寅)は年3回、3, 7, 11月に主に埼玉県の岡部チサンCC美里コースで開催され、53回を重ねました。優勝者の希望で次のコースが決まりますが、大抵は幹事一任となって慣れた同じコースになっています。キャディさん達の「お若い」とのおだてが効いていますね。

51回は今泉恂之介、52回に野口実、53回はなんと私でハンデのおかげの一言です。メンバー員は約35名、例会は毎回6-7組あたりに落ち着いています。

また、恒例の懇親会「エイト会」のご報告を。昨年(平22, 11)は赤坂の「四川飯店」で開催され40名の参加がありました。同窓会本部からは取材を兼ねて勝見さんも参加され、12:30から15:00迄、お料理とおしゃべりタイムに花が咲きアツという間に時間となりました。大勢でいると時間は短いですね。久しぶりの参加の人もあって話題はつきません。この歳になると健康・お小遣いのチャンスも少なくなってきました。次回が待たれますが、ぜひ大勢様とこの語らいの場を楽しみましょう。



2010(H22) 11.11 岡部チサンCC美里コース

「会計担当の懊悩」

上野 俊彦 (第17回卒)

生まれながらの方向音痴である。何しろ母の胎内から出る時も道に迷ったのか随分難産であったようである。

父の転勤のために小学校は三回変わっている。それ自体は苦痛ではなかったのだが通学路が覚えられずに苦勞した事はある。東京に引越してきた時の事である。明日から新しい学校に行くというので前日に父に連れられて予め通学路を下見した。翌朝元気一杯登校し無事に学校に着き、一日楽しく過ごして下校した。ところが朝来た道がどうしても分からず家に辿り着けない。方角的には合っているのだが最後のところが分からない。一時間ほどうろろした挙句、交番を見つけたので事情を説明して警察官に連れられてようやく家に帰ることが出来た。

現在も勿論方向音痴は健在である。同窓会の会計担当役員を引き受けて以来毎年決算時期になると口座のある金融機関を回って三月末残を確認する作業がある。年に一度しか行かない、というのは方向音痴にとっては辛い。ほとんどは駅の近くにあるので問題ないのだが一つだけ武蔵関の駅から五百メートルほど離れている信用金庫がありこれが難物なのである。去年行ったという安心感から方角だけ決めて何となく歩き始めるが見つからない。仕方が無いので駅まで戻って最初からやり直すが最後のところで躓く。どうしても去年行ったその信用金庫が見つからないのである。昔、高校時代に冬に黒菱山荘に行き第一ケルン付近で吹雪に遭い危うく遭難しそうになったことまで頭に浮かぶ。最後の手段はそこに電話を掛けて道に迷ったので道を教えて欲しいと頼めば良いのだが、電話の向こうでの従業員同士の馬鹿にした笑いが聞こえそうでつい二の足を踏む。

方向音痴の会計担当には思わぬ艱難があることを知っていただきたい。

バスケットボール部OB会報告

2011年5月10日

石神井高校バスケットボール部OB・OGの皆様へ

この度の東北・関東大震災に被災された方々に心からお見舞いを申し上げますとともに、今後の復興が順調に進むことをお祈り申し上げます。

バスケットボール部のOB会はここ数年、有志で年に一度、忘年会シーズンに入る前に、集まるようにしています。OB諸氏、全てに連絡が行き届いてはいたないのが残念なことでありますが、幹事会の努力で、年を追う毎に参加人数及び参加する年齢層の幅が増えております。

今年は数年来持ち上がっていた、都立大泉高校との定期戦を代々木第二体育館で3月28日に開催する予定でしたが、先般の大震災で延期せざるを得ない事になりました。都立大泉高校は、石神井高校バスケットボール部の礎を築いて下さった、故清水昭次先生の母校であり、また、多くのOBがライバルとして競い合った高校であります。また、代々木第二体育館は、本校20期堀部定男氏が勤務する関係で、バスケットボールの殿堂を現役に踏ませてあげようという気持ちから計画されました。今後、高校のスケジュールと体育館の空き状況を考慮して8月30日に開催予定です。（詳細は同窓会HPをご覧ください）OB諸子は動けるように準備しておきましょう。

昨年から33期の倉口勉氏が石神井高校に赴任しバスケットボール部顧問として頑張っており指導しています。写真は倉口先生が赴任した歓迎会の時のものです。過去に国立・芦花高校を関東大会に出場させた経験を持ち、近い将来、我が石神井高校関東大会に連れて行けると確信しています。我々、OBは、その時を待ち望んでいます。OB会としては、何時でも応援できる態勢を整えておく必要があります。今年度・来年度中には、OB総会を開催しなくてはと話し合っている所です。

その折は、多数の参加を期待しております。昨年の集まりでは、紫綬褒章に輝いた19期大塚啓二郎氏も参加し、OBからささやかなお祝いをさせて頂きました。

（文責 山下）



2011年度 母校教職員の人事異動

転出

お世話になった先生



転入

新しくいらした先生



職名・教科	氏名	転出先等
校長	小池 幸彦	足立西高校
副校長	宮地みち子	退職
地歴科(日本史)	石井 秀夫	飛鳥高校
理科(生物)	上岡 義晴	深川高校
家庭科	芳賀 康子	第一商業高校
理科(生物)	古田 眞	退職
理科(化学)	細田 伸昭	府中西高校
国語科	三谷 栄紀	退職(井草高校非常勤)
理科(実習)	山崎美佐子	町田総合高校
非常勤教員	梶野 茂男	退職
行政職	氏名	転出先等
事務	小林佳代子	練馬工業高校
事務	青木 崇	飛鳥高校
技能	市川由紀夫	駒場高校

職名・教科	氏名	前任校等
校長(日本史)	竹内 秀一	練馬工業高校
副校長(体育)	西塚 春義	小平南高校
理科(化学)	笠原 一郎	井草高校
理科(生物)	田中 恵子	葛飾商業高校(定時制)
英語科	谷本 友子	駒場高校
国語科	徳永 桃子	新規採用
数学科	内藤久美子	新規採用
家庭科	中田 京子	千早高校
理科(生物)	橋本瑠美子	新規採用(栃木県小山西高校より)
地歴科(日本史)	原島 義和	本所高校
国語(非常勤)	鈴木 幸夫	北多摩高校
行政職	氏名	前任校等
事務	彌川さおり	中学校支援センター経営支援室
事務	多田 緑	教育庁地域教育支援部管理課
技能	天竺桂健史	農芸高校

黒菱山荘の半世紀

同窓会副会長・黒菱山荘委員会委員長
浦川 伸一(高校32回)

1. はじめに

1998年、長野冬季オリンピックの男子滑降競技の舞台となった八方尾根スキー場。そのゲレンデのど真ん中に当校黒菱山荘は位置している。その立地場所は、麓の旅館ホテル街からさらに800mほど高地にある。標高約1500m。まさにゲレンデのど真ん中という表現が相応しい。

筆者が生まれた年と同じ昭和36年7月、黒菱山荘が竣工、今年で50年の月日が流れた。当時山荘建築に携わった諸先生、諸先輩の方々は、よもやこの山荘を建てた田舎の山奥が次第にリゾートスキー場に変貌し、オリンピックを招聘するまでに至るとは思いもしなかったことだろう。

山岳部OBを中心として建立された黒菱山荘は、長い間石神井高校の課外授業の一環として夏山教室、冬山・春山スキー教室に使用され続けてきた。そのため、卒業生や教員の多くの方々がこの山荘を訪れ、数限りない思い出を作り続けてきた、石神井の伝統を伝える数少ない場所でもある。

学校行事としてこの山荘を利用していたのは、昭和36年から60年までの25年間である。そこで、黒菱山荘を語るにあたり、内容を以下の3パートに分けてご紹介する事としたい。

最初は、山荘を建設するまでに至った経緯について。都立高校がなぜあの様な立派な山荘を保有できるに至ったのかについて記したい。

次に、25年間続いてきた学校行事について。数多くの人達が思い出を作っていたその生活についてごく一部ではあるがご紹介したい。

最後に、現在の黒菱山荘について。学校行事が行われなくなり、卒業生主体の利用形態となった山荘の近況と今後につき記すこととしたい。



2. 山荘建設

昭和39年の校誌石神井に、山荘建設に尽力された黒崎先生が、建設に至る経緯を実に丁寧にまとめていらっしやっただので、ここにその一部分を引用さ

せていただく。

「いつごろからであったか思い出せないが、とにかく私の周囲に十名内外の山の好きな仲間ができていた。何々山の会などといういかめしい名称も、うるさい規約もない、自然発生的にできたグループである。それでも年間を通じ何回かの山行を行なったし、種々の係りも時々に応じて当を得て決まったものである。メンバーは石神井の卒業生とその他半々で「だれかがさそえばすぐにまとまり、無理算段をしてでも出かけて行く」といった気軽な山仲間である。したがって山行も激しい闘争心をかき立てる種のものではなく、ひょうひょうとした四季の尾根歩きやスキーツアーを主としたものであった。(中略)

そのグループの山行に必ず組み込まれるのが冬の八方尾根と春の八甲田のスキー計画であった。年越しの八方尾根、滑りおさめの八甲田はその日時までが毎年同じように行われた。(中略)

山小屋設立の候補地として八方尾根黒菱を選定したのは昭和三十二年の秋である。黒菱はそのグループや本校の山岳部が毎冬訪れるところであったし、数少ない山スキーのメッカと言われていた所である。スキーは温泉・リフトのあるゲレンデがあってこそと考えている人々にはほとんど知られず、山が好きでたまらない人々のみが、ひっそりと山と雪に親しんで来た所であった。そこのよさを話しても、スキーではベテランを自負する人さえ鼻もひっかけようとはしなかった。三時間も雪の山を登り、電灯もない山小屋が一軒だけポツンと雪にうずもれてあるような所では洗練された神経の人には無理もなかったことかもしれない。その年の暮れから三十三年の正月にかけて例のごとく黒菱を訪れた帰り、正月の五日の夜、ふもとの細野部落(現在の白馬村)にある丸山与兵衛氏の宅で最後のコンパを行った。丸山氏には前々より種々のめんどろをかけ、お世話になって居た。丸山氏をかこみ久々に風呂に入って怪気談をあげている時、山小屋設立の敷地の相談をしたところ、丸山氏も大賛成をしてくれ、その部落との交渉をひきうけてくれた。」

長い引用となったが、ここまでが山荘設立のきっかけであり、このあと黒崎先生らは、山岳部および山岳部OBに相談し、共同計画で建設をすすめることとなった、と記してある。その後、当時の松木校長に相談され、山岳部OB会らの協力のもと、学校施設として建設する見込みがたち、昭和36年7月に竣工式を行うまでに至ったそうである。

竣工式を迎えた時の感慨を、黒崎先生は次のように記されている。

「七月二十五日には手崎会長、畑山校長の参列によりおごそかに竣工式が行なわれた。こうして黒菱山荘は完成した。この間、どれほど多くの人々の熱

意と善意の行為があったことだろうか。松木前校長の先見、畑山現校長の積極的な生徒指導理念と実行力そして私ごときのものに建設事務連絡をおまかせ下された土屋校務主任、何かと細かい心配りで、建設の便宜を計って下さった、若菜、渡部、田中、石木の諸先生方、時々感情的に参ってしまうのをはげまして下さった水谷先生、そして学校の先生方全員の理解ある御協力、後援会の会長を始めとする方々の熱意、そしてまったく表面に現われることなく黙々として文字通り縁の下の力持ちぶりを発揮して下さった山の仲間や山岳部OBの諸君、丸山与兵衛氏の並々なぬ御厚情……黒菱山荘はそういったあがない難いものの結晶なのである。」

その竣工式が行なわれた日から生徒の夏山教室が開始され、以降長きに亘る石神井の伝統の一つが始まったわけである。山岳部OBで、山荘の設計者でもある千賀氏（高校6回）が、昭和63年の校誌石神井で以下のように記している。

「今でこそ、黒菱山荘まで、きれいに舗装された林道があり、車ですぐ登ってしまえますが、当時はケーブルだけで終点の兎平から建物の柱やセメントの資材を人の背を借りて荷上したものでした。鍋・釜類や寝具なども同じようにOBの力を借りて荷上され、『プラスチックの食器では食べた気がせん。俺に任せろ。』と重い瀬戸物を背負って頑張った男もいました。」

黒菱山荘はまさにこうした石神井高校を取り巻く人達の絶大な熱意の総意で建てられたのである。

3. 学校行事と黒菱山荘

竣工と同時に黒菱山荘は、学校の課外活動用の施設として使用を開始され、毎年数多くの生徒を迎え入れ続けてきた。夏山教室は、例年7月24日から8月6日頃まで唐松岳登山や飯盒炊飯などを主体に山小屋の生活を体験できるような内容を工夫してきた。

冬山教室はスキー講習を主体とした内容で、例年12月24日から1月7日頃まで年越しの実施、春山教室は3月22日から4月5日頃までそれぞれ行なわれてきた。

各教室は、それぞれ3つの班に分けられ行なわれてきた。一つの班は通常教員2、3名と生徒30名前後で構成し、東京から教員の方々が夏は電車、冬春はバスで引率してこられた。

一行が入荘してから出荘するまでは、石神井の卒業生の有志が学生時代の間、2、3年に亘り生活指導や炊事等、生徒たちの世話をしてきた。

この有志は、当初山岳部OB、OGを主体に始まったが、次第にその輪は石神井高校の中に広がり、高校時代に山経験のない人達もこの山荘の魅力にひかれ、毎年山荘の仕事を引き継いできた。いわゆる山荘OB、OGである。その山荘OBの一人である佐藤氏（高校25回）は、当時のことを昭和50年の校誌石神井に次のように記している。

「二人、二人、三人。赤いザックに黄色いザック。

両手に袋をぶら下げている生徒もいる。尾根つたいの涼風が心地良いことだろう。いよいよ生徒達の到着である。

一週間前から準備の為に入荘していた我々OBが最もうれしいそして緊張する瞬間である。今朝はいつもより念入りに歯を磨いたし、久しぶりに髭も剃ったし、ザックの奥の方に仕舞っておいた櫛なども登場した。OBの頭髪に何日振りかの分け目が入っている。リーダーのS氏はアフターシェーブローションまで塗っている。紅一点のN女史は啞然。」

黒菱山荘近辺でのスキー講習は、本格的なアルペンスキー場ということもあって、素人の生徒を指導するのは一苦勞であった。山荘OBの直川氏（高校26回）は昭和50年の校誌石神井に以下のように記している。

「様々な方法でスキー教育が行われていた。ゲレンデにスリッパで出て行き、大声をはりあげる先生、一本滑っては『ブカー』と一服するOB、八方のゲレンデをあちこちと時間一杯滑りまくる先生、ムカデ、練習後に山荘の裏で泳いだこともあった。新雪のため、雪の中を泳ぐのである。このような中から、生徒と教師のコミュニケーションが、一層深まっていったようである。」

山岳部や山荘OBあつての山荘と思われがちだが、山荘における教員の方々の存在というのは絶大であり、ご多忙の中、山荘を支え続けてきて下さった教員は数知れない。昭和39年に石神井に赴任なさり、その後20年以上もの長きに亘り山荘に尽力されてきた保母先生もそのお一人である。

「冬のスキー指導は寒さとの戦いである。易しいスキー操作の反復練習の後、歩き始めるが山荘を一周するのに小一時間必要である。強風で有名な八方尾根では、山荘周辺の地形が複雑怪奇の様相を呈し、雪面とスキー操作の読みがないと動きがとれない。熟練者は一周に2分と掛からないから、じっと待つ。助けたい気持ちをおさえ我慢する。寒さに耐えることは初心者指導の必須の条件である。

（中略）春のスキー教室が終り、後始末の仕事が始まると、幾人かのOBの落着きがなくなる。大学も4年となると就職、卒業論文等で多忙になり、山荘を追い出されることになるからである。教え子と教



師の関係は、とっくの昔に消え、同じ釜の飯をついた山の仲間であり、スキー仲間である。保母『先生』がいつの間にか『サン』になっており山荘の先輩達を呼ぶ呼び方と同じになっている。」

一方、山荘の存在意義そのものであった生徒の目には、山荘とはどういう風に映っていたのだろうか。

「山荘は素晴らしい所だと思います。学年など関係なく新しい友達がたくさん出来、東京では決して味わえない生活ができます。

今の世の中、お金さえ出せば好きな所へ、好きなことをしに行けます。しかし、見知らぬ人達との集団生活で新しい友達を得たり、楽しさ、素晴らしさを味わうことは決してどこでも経験できることではありません。年々山荘に来る人が減ってきて、それも特定の人達に限られてきています。もっとも多くの人来てもらい、いろいろな経験をし、たくさんの思い出を作っていってほしいと思います。」と、昭和58年の校誌石神井で語ってくれたのは、高校時代に五回も山荘を訪れ、自らも山荘OBとなった今井氏(高校36回)である。時代の流れの中で山荘利用者は、減少の一途をたどっていった。だが、石神井の伝統と言うべきこの山荘を愛する心は、ずっと生徒達を通じて伝えられてきたことだけは確かなようである。

そして山荘の理解者として忘れてはならないのが、父母と教師の会のご父兄たちである。父母と教師の会の方々には毎年我が子の課外授業の場を一目見ようと、多くの方々にご訪問頂き、その山荘の生活の一端を体験していただいている。山荘OGでいらっしやった楓さん(旧姓新山・高校26回)は、父母を山荘にお迎えしたときの印象を、昭和54年の校誌石神井に次のように記している。

「お母様方が山荘へ入られますと、料理係の私は針のムシロに立だされました。生徒の皆さんの食事を作るときと決して心構えは違っていないのですが、何といましようか胸がどきどきしていたような気がします。毎日食事作りをなさっているプロの口に合うかどうか心配でした。多少の不満があっても無理をして食べて下さったのではと、今になって思い返すことがあります。」

山荘を訪れた父母の方々は、皆さん山荘のよき理解者となってくださり、今日までこの山荘を支えてくださっている。このPTAの山荘ツアーは平成23年の現在も継続されている。

4. 学校行事終了後の黒菱山荘

「昭和60年から黒菱山荘を使用しての校外施設(夏山教室、冬・春山スキー教室)が諸般の事情で中止となり、山荘の存続が危ぶまれたが、61年より同窓会が山荘の管理運営への参加を受け入れたために、山荘運営の実務は同窓会に移管し山荘OBがその任にあたっている。」

昭和63年の校誌石神井で、当時の教頭でいらっしやった北川先生はこう記されている。石神井高校を中心に集まった山仲間の熱意の結晶で建てられ

た山荘が、学校施設として石神井の伝統を築き上げた。そして生徒が来なくなった今、その役目を終えたかのように見える。現在山荘の管理を行っているのは、私たち同窓会の有志であるが、石神井高校の生徒のための施設として建設が許された山荘であるからこそ、そう感じる方々がいらっしやるのは当然とも言えよう。

歴史を閉じる決断はたやすいことであるが、時代を乗り越え、後世に引継ぎ続けることはことこの山荘に限って言えば、これほど「きずな」を強く感じることが出来る物理的な存在はないと考えている。

あまり知られていないのだが、毎年黒菱山荘委員会では、学校のご協力の元、数名~10名程度の山荘教室を開催している。平成22年の冬も10名程度の生徒を受け入れ、昔とさほど変わらない生活を黒菱山荘で体験してもらっている。

その際、入荘と下山の際に、地元対岳館の丸山庄司様、そのご子息で館長の徹也様にご挨拶をさせていただいたが、庄司様から「下山後の生徒たちの目が変わっていたね。」とおっしゃってくださったのには驚かされた。山荘の存在意義は、やはり多感な世代である現役の高校生達に山の生活を体験してもらうことなのだ、と再認識させられるお言葉であった。

現在、黒菱山荘の管理および運営を担当する黒菱山荘委員会は、同窓会の下部組織として、10名弱のスタッフで維持管理活動を継続している。この10年あまり、新しいスタッフの参画もないのが気がかりではあるが、みな山が好きだし、石神井が好きだし、仕事以外で気軽に付き合うことが出来る数少ない面子であり、とてもチームワークよく活動出来ている。

「軽率な利用をしない限り、黒菱山荘は石神井高校の誇りうる校外授業の場として大いに役立つものであるにちがいない。」

この、27年前の黒崎先生の言葉が今も生き続けていると信じ、石神井高校に関係する皆様方のご来訪を心よりお待ちしております。



黒菱山荘を利用してのスキー体験教室実施

『山荘には、何か力がある!』

昨年末、12月27日～30日に石神井高校生10名が、白馬村にスキーに行き来しました。スキー部の冬季合宿を兼ねて、一般の生徒にも広く声かけをしたところ1年生7名2年生3名が集まりました。初日、石神井高校に集合しマイクロバスに乗り込みました。白馬村に向けてバスは順調に進みました。白馬村を目の前にした美麻村を過ぎたあたりから雪が本格的に降ってきて、私たちのスキーへの気持ちを高ぶらせました。

昼前は麓の対岳館に到着し、各自スキーの準備を済ませ、13:00過ぎには名木山ゲレンデでスキー講習をはじめました。講師は、山荘委員会の24期石井・27期新田（スキー指導員）が担当し軽く足慣らしを行いました。あくる日は、山荘まで荷物を持っていかなければなりません。ここで技術を身につけなければならぬので、みんな一生懸命取り組んでいました。夜は、対岳館でおいしい食事と温泉を楽しみました。2日目はいよいよ山荘です。咲花ゲレンデから北尾根経由でリフト2本を乗り継ぎ山荘に着きました。（最近では、兎平リフトが動いていないことが多くアルペンリフトで黒菱平まで行くと山荘にたどり着くのが困難）10人の生徒のうち2人は昨年度、山荘に宿泊していますが、他のものは山荘初体験です。最初は、風呂もない・テレビもない・寝袋で寝るといった都会とはかけ離れた生活に戸惑い『帰りたい』といていた生徒も、山荘に慣れるのには時間はかかりませんでした。スキー講習はもちろん、雪かき・かまぐら作り、食事の準備や小屋掃除、最終日のたいまつ滑走と初めてづくしの体験をして下山しました。

下山後、対岳館で風呂にはいらしていただき、お土産などを購入しマイクロバスで東京に戻りました。お世話になった対岳館の丸山庄司さんからは『山荘に行き来して、生徒の目つきが変わったね』と言われました。山荘には、何か力があるんだと再確認させられました。

生徒のコメント

僕が山荘を見た第一印象は『広い』でした。普通の家みたいですし、周りは一面雪景色で素晴らしい場所でした。また山荘から少し滑ると林道から遠くに山脈が見えて、とても清々しい気持ちになりました。僕はこんな素晴らしい所には毎年行きたいと思いました。

2年男子

黒菱山荘は、冬はスキー場の中にあつて、リフトを使わなければ通れないところにあります。1年生の夏に黒菱山荘に行つたときと景色が全然違つていて、不思議でした。自分はスキー初心者でしたが、石神井OBのインストラクターの方がていねいに教えてくださつて、初めは斜面を見るのもつらかったのですが、練習を続けると怖さも薄れてだんだん楽しく滑れるようになりました。

山荘での生活は、後輩やOB・OGの方や先生方ともお話ができ、みんなでご飯を作つたりお菓子を食べたりしてすごく楽しかったです。昔の石神井高校の様子もたくさん見たり聞いたりできました。石神井高校が好きなのは、黒菱山荘に行つてみてください。もっと好きになると思います。

3年女子



八方尾根の自然を守って 黒崎夫人が白馬村に寄付

石神井高校に長く奉職し、山岳部顧問として永年、生徒、OBの登山活動の指導に当たられ、黒菱山荘の建設に多大な貢献をされた故・黒崎 峻先生の奥様・昭子夫人がこのたび、積年の八方尾根への思いを込めて白馬村に1千万円を寄付をされました。

昭子夫人は今回の寄付について、「山とスキーをこよなく愛した私たち夫婦は昭和20年代後半から足しげく八方尾根に通っていたのです。そして、昭和36年には対岳館の丸山与兵衛さんのご理解とご協力のもとに八方尾根黒菱に石神井高校黒菱山荘ができ、さらに昭和38年には山岳部創立10周年を記念して山岳部OB会を中心として「石神井ケルン」が建られました。

山荘はスキー教室、林間学校の課外授業で当時は抽選があるほど人気があり、また石神井ケルンは他のケルンとともに今でも遭難防止や景観のポイントとして八方尾根のシンボルになっているのです。

これらは皆、地元のかたがたのご理解とご協力のお蔭なのです。ですから主人がこよなく愛したこの素晴らしい八方尾根の自然と景観が将来にわたり末永く維持されることを私は心から望んでいます。

特に石神井ケルン(通称 八方山ケルン、石神井ケルン)の存続は私たちにとって掛け替えのないものなのです。でも近年、八方山付近の地形の変化や崩壊によってケルンの定期的補修が欠かされてなくなっているのです。

山岳部が廃部になった今、将来にわたるケルンの維持管理は私たちには到底ムリなことから、八方尾根の自然、景観保全の一助と、ケルンの将来にわたる維持管理を願って今回の寄付をさせていただきました。」と八方尾根への讚美とケルンへの思いを語ってくださいました。



白馬村に寄付する黒崎昭子さん

白馬・山とスキーの総合資料館図書室に山の名著「黒崎文庫」誕生

八方に「白馬・山とスキーの総合資料館」が昨年オープンしましたが、その図書室に1千万円の寄付にあわせ黒崎峻先生愛蔵の創世記の山岳関係蔵書24冊を黒崎昭子さんが寄贈され、「黒崎文庫」として開設されました。

今回寄贈された「日本アルプス」(小島為水著)、「山行」(槇、有恒著)など24冊はすべて「日本山岳名著解題」に取り上げられており、神田神保町の古書店では別格の扱いを受けている名著ばかりです。

なお、資料館は八方インフォメーションセンターに隣接しており、「山とスキーの王国」に向けてその拠点を目指しています。毎週水曜日休館。電話0261-72-2477 (記/13回Y.N生)

白馬・山とスキーの総合博物館—Hakuba Alpine Library—

2010年7月に白馬村アルピコバスターミナルの裏手の八方文化会館2階に山とスキーの総合資料館がオープンしました。八方尾根スキー場を拓いた福岡孝行氏の足跡をたどる『福岡孝行記念室』をはじめ、『山とスキーの企画展示』・『白馬の民族コーナー』・『山とスキーの図書室』とかなり見ごたえのあるものとなっています。白馬村を訪れたときは是非見学してみてください。入館は無料です。営業時間は10:00~16:00・水曜日休館。

黒菱山荘の管理をお願いしている『ホテル対岳館』の丸山庄司さん・徹也さんも展示に大いに関わっておられ、庄司さんは館長をされています。

創立70周年 記念式典、 祝賀会開催



祝賀会会場の様子



記念講演(古在氏)



在校3年生有志によるエイサー披露



祝賀会歓談の様子



ジャズ演奏



お祝いのケーキ入刀(海老沢氏)



記念の粗品の保温マグカップ

2010年10月30日土曜日母校創立70周年記念式典、祝賀会が盛大に開催されました。文化功労者顕彰を受けられた、古在氏(中1回)、海老沢氏(高3回)両氏による講演会は、全校生徒が熱心に聞き入りました。生徒による、ダンス、エイサーも披露され、式典に華を添えました。式典後に開催された祝賀会には、雨にもかかわらず、来賓、同窓会員を含め、約250名が集まり和やかなひと時を過ごしました。川口氏(高9回)、鈴木氏(高9回)両氏のジャズ演奏が、会場を一層和やかにしてくれました。また、古在氏、海老沢氏には、文化功労者顕彰受賞を記念して、同窓会よりお祝いの粗品とケーキが贈呈され、会場は一層華やき楽しいひと時となりました。

編集 後記

今年の『きずな』は、盛り沢山の内容で、編集に苦慮しました。

13回生が東北大震災で被災した同期に義捐金を送った話は、心が温かくなり、さすが石神井生だ!と思います。この話を13回生のJRに勤務しているK氏が、JRの幹部にメールで披露したところ、「お前の高校の絆がうらやましい」といわれたというエピソードが寄せられました。

そう、私達石神井生は、きずなで結ばれているのです。人と人のかかわりが、どんなに大切かということ、次の世代へ伝えていかなくてはなりません。

今年の『きずな』も、取材、寄稿、ページ組、印刷等など、まさに年齢やジャンルを超え、人々とのかかわりで出来上がりました。今期は、もっと同窓会活動を理解していただくよう更なる努力を重ねたいと思います。(S.K)

「きずな」第60号

発行人: 城和裕

編集人: 板谷方彦、勝見鈴代

発行所: 東京都立石神井高等学校同窓会事務局 石神井倶楽部
164-0002 中野区上高田 1-14-7
TEL. 03-3319-1112

印刷所: 株式会社 文明社

ウェブサイト:
www.shakujii-club.gr.jp